

---

# 最強の無能力者

まさかさかさま

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

最強の無能力者

### 【Nコード】

N9760W

### 【作者名】

まさかさかさま

### 【あらすじ】

能力が全てのこの世界。才能が全てのこの世界。

弱い者は淘汰され、常に強い者が上に立つ。異能力とはなんなのか、超能力とはなんなのか。

ただ平和に暮らしたかった無能力者、異無 良人は、ある日『烏合の衆』<sup>レジスタンス</sup>に目を付けられ、異能の戦乱に巻き込まれていく。

これは、一人の無能が世界に喧嘩を売る話。

## 序章

それは異常な光景。

有り得ない状況。

対峙するは、絶対の超能力者と一人の無能力者。

ただ対峙しているだけなら問題は無い。

この光景の異質さは、その戦況にある。

圧倒しているのだ。

無能力者が、超能力者を。

一本の棒切れを持った無能力者が、悪魔の光鎧を纏う超能力者を。

無能力者は既に瀕死の重傷。超能力者は全くの無傷。

にも関わらず。怪我などものともせず。

超能力者は、無能の雑魚一匹に追い詰められていた。

「ふざけるな……。ふざけるな、ふざけるなふざけるなふざけるな  
虫がああああ！！」

超能力者は叫び、右半身に全念力を注ぎ込む。

瞬間、右の義手が、右の義足が、右の義眼が、右半身が、けたたましい轟音と共に吹き飛び、代わりに大質量の光の噴射が右半身を形作る。

「冗談じゃねえ、いよいよ化け物だ。」ライトアップ「右軽光」とはよく言ったもんだな」

出血過多とダメージで、今意識があること自体が奇跡の無能力者は、本当に冗談でも見るかのように苦笑いで嘯く。

ライトアップ「右軽光」。学園最狂の強化能力と謳われた異能力。

読んで字の如く、右半身を代償に光の鎧を纏うことの出来る、常軌を逸した異能力。いや、その速さとパワーは正に“超”能力と呼ぶに相応しい。

「潰れる虫いいいい！！」

異形の超能力者の姿が消える。

瞬きする間もなく、無能力者の顔面へ閃光の右拳が突き出される。文字通りの光速移動。超能力者の通った跡は、幅何メートルにも亘って抉られている。

およそ人間の反射神経では死んだと気付くことすら許されない速さ。光の速さで迫り来る物体を避けることは、まず不可能。

不可能のはずだ。

だがそもそも、無能力者は人間ではない。

「……っつ！」

ゴツ、と後方の地面が吹き飛ぶ。無能力者は爆風で更に傷を増やすが直撃ではない。

何が起きたのか、超能力者の理解が追いつかない。

いや、起きたことは分かる。斬られたのだ。光の噴射により狂化ライトアップされた右腕を。そして切断された右腕は、勢いそのままに無能力者の後方の地面に激突したのだ。

そんなことは分かっている。

なぜ何の力も通っていない棒切れで、右腕を斬られたのかが分からないのだ。

「まただ。また、斬りやがった……」

爆風で倒れ伏す瀕死の無能力者に恐怖の目を向ける。

早く次の行動に移らなければならぬが、能力の反動で動けない。その間に、やはりソイツは立ち上がる。

絶対の超能力者を前に、やはり無能力者は立ち上がる。

「何だ……」

ポツリ、と。気付いたら咳いていた。

言わずにはいられなかった。

聞かずにはいられなかった。

単純にして、明快な一つの疑問。

「一体、何なんだお前は!？」

ソイツは何でもないかのように返答する。

「無能力者だ」

## 一話

例えばの話。

そう、これは例えばの話。

もし登校中、路地裏で一人の女の子が襲われていたとしたら。もしその子がクラスの同級生で、美少女と呼ばれるべき類の子だとしたら。

しかも、携帯の充電は切れていて、警察に通報は出来ない。

こういう場合、俺は一体どうすればいいのか？

選択肢は三つ。

- 一、なけなしの勇気を振り絞り、女の子を助ける。
- 二、何も見なかったことにする。
- 三、そわそわする。

俺的には三がオススメ。

これならば、助けようとはしましたが足が竦んで動けませんでした。見捨てるつもりはなかったんです。その他の素通りしてく奴らよりずっと良い子です。僕は悪くない。

と、労力を要さずに自分への言い訳が成り立つ。

という訳で俺は、そわそわしながら路地裏の光景を傍観。

ああ、助けないとなー。

でも俺には無理だしなー。

足が震えて動けないなー。

……。

アホらし。

別に足なんぞ震えていないし、自分への言い訳なんかどうでもい

いいし、他人がどうなるうと知ったことではない。  
なのに俺は何をやっているのか。  
まあいいか、素直に見なかったことにしよう。  
さあ登校登校。達者でな、名も忘れた同級生。

普段の俺ならそうしていただろう。  
だが今回は場合が違う。

例えばの話。

そう、これは例えばの話。

もし登校中、路地裏で一人の女の子が襲われていたとしたら。もしその子がクラスの同級生で、美少女と呼ばれるべき類の子だとしたら。

しかも、携帯の充電は切れていて、警察に通報は出来ない。

更に、ここにもう一つの要素が加わる。

もし、襲われている女の子が、寝たきりの妹と瓜二つだとしたら？

選択肢は三つ。

俺が選ぶのは……。

「おはよう、お二人さん。仲良く二人で登校かい？俺も混ぜてくんねえかな」

……選択肢、四。陽気に挨拶。

突如現れた闖入者に、ビクツと顔を向ける妹似の少女。

「あ、え、ええと……あ、あの、助け……て」  
少女が妹と同じ顔で、そんなことを言う。恐怖に歪んだ顔で、助けを求める。

ちっ、まったく人の心をもてあそぶ面である。

「やあ、名も忘れた同級生」

ところで、こいつの名前、なんだっけか。そもそも入学式はつい三週間前だったから、覚えていなくても仕方ないだろう。いや、普通なら三週間もあれば同級生の名前なんて自然に覚えてしまうものだと思うが、覚えていないものは覚えていない。

実に俺の気を引く容姿だったため、顔だけは覚えていたのだが。いくらなんでも、妹の顔を忘れることはないからな。

さて、そんなことより、どうしたものか。

ついしやしやり出て来てしまったが、何をどうすればいいのか全く考えていなかった。

まあ、あれだ、まずは状況確認からだ。何事においても、周囲の状況を把握しなくては始まらない。

場に居るのは、俺と、名も知らぬ妹似の同級生と、そして名も知らぬ同級生を襲っている白い学生服を着た女生徒。

ややこしいから仮に襲われていた方を“名無しの奈々子”、襲っていた方を“白子”としよう。

白子の特徴は、白い制服に、肩に掛かるぐらいの真っ白な髪の毛、白く綺麗な肌、腕にはアンティークな変わったデザインの白銀の腕時計。全身白づくめである。なんか、どこかで見たことがあるような気がするが、はて。

で、状況を簡単に一文にまとめると、『白子が奈々子の首にナイフを突きつけている』だ。

金目当てのカツアゲにしては随分と物騒な得物である。単なる一学生が裸で持っていていいような代物ではない。

「……あんた」

どうやって血と涙と金を流さずに場を収められるか思考していると、小さくも透き通った聞き取りやすい声で、白子が俺に話し掛けた。

ん？ と、意識と視線を向ける。暗くて顔はよく見えないが、その表情は多分渋面だ。



そして、ゆっくりと口を開き、言葉の続きを呟く白い少女。

「そんなだから死ぬのよ」

白い少女は、確かにそう呟いた。

そう、“呟いたのだ”。俺の耳元で。

「……っつっ！」

いつの間ここまで移動して来たのか。

彼女はつい先程まで奈々子に詰め寄り、ナイフを突き付けていた。距離にして、七メートルぐらいあっただろうか。

それが次の瞬間には、耳元で俺に囁いていたのだ。

まるで、“移動する”という描写を抜き取ったかのように。まるで、俺との“空間”など元から無かったかのように。

背筋に凍りつくような悪寒が走る。

彼女はナイフを持っていた。彼女はすぐ横に居る。そして俺は、今さっきの場面の目撃者。この状況から次の彼女の行動を予測するに、ろくでもないことが起きるだろう。

即ち、すぐにでもナイフで首を掻っ切ることの出来る位置に白子はいる。

脳が命の危機を察知し、なかば条件反射のように白い少女へと振り返る。

……が。

誰も、居ない。動いた気配すら無かった。

最初から誰も居なかったかのように、忽然と姿を消してしまった。いた。

……何がしたかったんだ？

俺が現れたから逃げていった、のか？ 全く訳が分からない。それに、こちらを見るあの渋面。あの言葉。俺のことを知っているの

か？

いや、いい。今は助かったことを素直に喜ぼう。ただの不良女子か何かだと思っただが、まさかあそこまで危ないやつだったとはな。

「おい、大丈夫かお前。えー、と……名無しの奈々子」

ぺたん、と座り込んでいる妹似の少女に語りかける。気が抜けてしまったのだろう。何故こいつが、あのような危なっかしい女に追い詰められていたのかは分からないが、やはりそれこそ俺の知ったことではない。世界は広い。どこの物語の主人公のように、事あるごとに他人様の人世なんぞに介入していたらキリがない。

「……ななこ？ あ、ええと、はい、大丈夫です。助けていただきありがとうございます御座います」

ぺこりと深くお礼を述べる奈々子。見事な九十度だ。あだ名を三角定期に改名してやってもいいぐらい綺麗な九十度だ。

「あの……異無さん、でよろしいんですね、お名前。同じクラスの」

何が不安なのか、おずおずと尋ねる。まあな、とだけ一言。

「お、そっぴや時間やばいな。じゃ俺はこれで」

早くしないと遅刻するぞ、と背を向け退散しようとする路地裏から出る。

はあ、柄にも無いことするもんじゃないな。少し急がないと間に合いそうにない。俺のクラスの担任教師は“大人も泣く鬼教官”で有名だからな。泣く子が黙る方が有益だというに。

思考を切り替え、急ぎ足で学園のある方向へと……

「あ、あのっ！」

走り出そうとすると、先程の少女が路地裏から飛び出て、声を掛けてきた。

「何だ？」

手短かに聞き返し、

「な、名前っ」

「だから、異無。異無ことなし 良人りょうじんだ。さっき、お前自身言っただろ？」

「い、いえあの、そうじゃなくて、ですね。えと、私、の名前……」  
「何だ、もつたいぶってないで早く言え。担任の火雷からいに殺されるぞ」  
「す、すみません」

「いいから」

「う……はい。奈々乃、です。奈々乃ななの 水羽みづです」

「あー、はいはい」

それだけ言い残し、さっさと走り出す。とんだ時間を食ってしまった。

妹がまだ寝たきりじゃなかった頃は、元氣過ぎて手に負えないぐらいのやつだったんだがな。俺の妹と違って随分ノロノロした奴だな、奈々乃。

……奈々乃……奈々子。

おしい。一字違いだったか。

近年、異能力なるものが発見され研究されている。

いや、近年といっても、歴史的観念から見ての近年であり、俺達基準での近年ではない。それこそ何十年単位での話だ。

大体、俺の親父が生まれた前後の年だから、五、六十年前になるのか。

その年代までは、石油やガスなどの化石燃料が一般的に使用されていたらしいのだが、コストもエネルギーも応用力も上回る“念粒子”の実用化が成功してからは完全に廃れてしまい、今では一部の古物趣味の人間が使う程度。

念粒子が実用化された当時は、どこの国も環境問題がなんちゃらコストダウンがなんちゃらで大喜びだったそうだ。

もちろん、実用化に伴い、それなりの損失もあったという話だが、その損失の何倍もの収益が得られたのだから万々歳だろう。

そももって、この“念粒子”の捻出方法だが、ここが最大の利点で、やろうと思えばいくらでもエネルギーを放出し続けることが出来るという、化石燃料時代から見れば夢のシステムである。

簡単に要約して説明すると、世の中には二種類の“力の本質”というものがあり、大まかに『外気』と『内気』に分かれる。

生物や植物など、有機物に宿る“力の本質”が『内気』。物体や空間、無機物に宿る“力の本質”が『外気』。

で、この二つを混ぜ合わせた物質が『念粒子』であり、これを燃料にして起きる現象を『異能力』という。

万能エネルギー『異能力』を駆使する『異能力者』。

そんなお前達が通うところが、世界最大級の“異能力者研究兼育成機関”通称『神屠学園』だ。

ちなみにこれらの復習だが、ちゃんとしたレポートにまとめると  
フィルマーもビックリの超大定理になるんだが、おい、聞いているか、  
おいコラ俺の授業で寝るとはいいい度胸だな、俺はそんな度胸の持ち  
主が大好きだ、ぶっ殺しがいがあるからぬああありやあああああ  
あああああああ！

「ぎいいああああああああああああっつー！」

表面張力を駆使しなければ零れてしまうほど、いっぱい水を入  
れたバケツを両手ずつに持ちながら、廊下の前で授業に聞き耳を立  
てていると、男性二名分の雄叫びが聞こえてきた。

また、あのアホの野郎か。

入学初日から、これで何回目になるだろうか、やつが火雷からい 京二きょうじ  
の烈拳の餌食になるのは。

嘆息しながら、俺は両耳を閉じようと……つとと、バケツが  
あるから出来ねえ。

次の瞬間、耳を塞ぎなくなる程の轟音が鳴り響く。

ドゴオツドゴツドゴオツ、巨人でも歩いてんじゃねえの？ と  
疑いたくなる衝撃と爆音の嵐。校舎のあちこちがミシミシと振動す  
る。もはや巨人走ってるだろ。

そして十数秒後ピタリと爆撃音は止み、ガラララ、ピシャ、フラ  
フラ、バタツ。

教室の扉が開き、一人の男子生徒が放り出され倒れる。

そいつは、なけなしの力を振り絞りこちらを向くと、バツが悪そ  
うに苦笑するので、いつものセリフを言ってる。

「お前、学習能力って知ってるか？」

「そっくりそのまま返すよ、良人。また遅刻して。いい加減、本当  
に殺されかねないよ？」

そつやって立ち上がる男子生徒の名前は、火巻かまき 行地ゆきぢ。入学以前  
からの幼馴染だ。

「にしても、相変わらず容赦ねえな火雷の野郎は。あれだろ？ 超ギリギリ烈拳サンドバックだろ？」

「あれじゃ大人も泣くわけだよな」

火雷 京二。

知識も能力も一級品だが、そのあまりに粗雑で乱暴すぎる教育方法が災いし、俺達のクラス、通称“負け組み”の担任にまで追いやられた問題教師。

最速の“雷”と最火力の“炎”を同時に操る、世にも珍しい“二突型”の超能力者だ。

火雷は、気に食わない生徒には暴力的制裁を加えることで有名だ。生徒を壁際に追い詰め、自慢の烈拳ですぐ側の壁を連打するというもので、生徒に大きな傷を負わせないギリギリの場所を正確無比に打殴しまくるのだ。

そんな絶叫マシンもビックリのショック療法を採用しているアブナイ教師である。

でもって、俺は朝遅刻してしまったため、現在バケツを持って廊下に立たされている。いつの時代だよとか、それ以前に体罰だ。

「よく壊れねえよな、壁」

「火雷が自腹で修繕した特注の防壁なんだってさ」

「ああ、どつりで教室の一部だけメタリックだと思ったら」

入学から三週間目にして明かされる衝撃の事実である。

てか何で教師やってんだ火雷。行くところ行けば、いくらでも稼げるだろうに。

「なんたって“超”能力者様なんだから。」

「そういえば、次の授業って能力測定だよな？」

行地が、なんととはなしに聞いてくるが、むしろ露骨にわざとらしい。

「そうみたいだな」

軽く答える。

能力測定か。どうにも憂鬱だな。

やはり俺の言葉に暗いところを感じたのか、はあ、と溜息をつく行地。

ここ『神屠学園』では、学期初めに“能力測定”なるものが行われる。

一人一人の実践的な“能力の強さ”を測定し、学園全体での順位をつけるのだ。それも、大学部高等部中等部小等部、全体での順位である。

例えば小等部の人間でも、順位でさえ圧倒していれば、大学部の人間をパシリにすることも出来るといって、無茶苦茶なシステム。まあ、それは極端な話で、実際は大学部の人間を圧倒できる小等部なんて有り得ないのだが。

そんな有り得ないガキが小等部にいることも、また事実なのだから、世の中どうかしている。

「嫌だよねえ。いい加減にしてほしいよ。そもそも、僕達おちこぼれの順位なんて見て何が楽しいのさ」

「ま、そっちの方が生徒のモチベーションも上がるんだろ」

「僕らのモチベーションは下がるけど、それはいいの？」

「“負け組み”は、そも生徒扱いされてないってこと」

学期が始まる度、まるで決まりごとのように交わすこの会話。何回目になるのかは、能力測定の数を数えれば分かる。

もう一度嘆息する行地。昔から溜息の多いやつ。

「ま、そんな気を落とすなよ。お前の下にも下はいるんだ」

「とんだ自虐ネタだね。前回の僕の順位は下から二位」

「俺の順位は最下位、ってな」

俺はハハッと笑い、行地は楽しげな苦笑という器用な笑顔で応える。

それから俺と行地は、チャイムが鳴るまでとりとめのない雑談に興じる。どうでもいいことを、真面目に、だが根本的には適当に、時間を潰す。

例えば、

「頂点は誰にも渡さねえ」

「底辺の間違いじゃなくて？」

「俺に並ぶやつがないから頂点だ」

「底辺は辺だからね」

「階級制度は基本ピラミッド型だが、この学園の階級制度はひし形だな。そういえば誰だったか教師が言っていたのを覚えてる」

「一位が上の頂点、最下位が下の頂点？」

「すると横の頂点は誰と誰になるのかって話だ」

「ひし形の中心点をオーとして、エックス座標の判定基準によるね」

「ワイ座標の判定基準は力の大きさだな」

「エックスの方はなんだろうね」

「ひし形だから、一位と最下位のエックス座標はゼロ。更に言うと、横二つの頂点のエックス座標は、それぞれ絶対値がマックス」

「つまり？」

「エックス座標は、一位と最下位が持っていない値ってことだ。：

…お前は何か入ると思う？ 行地」

「普遍性、じゃないかな？ この場合、エックス座標のプラスマイナスは無視して、絶対値の大きさの話で。だから横の頂点二人は、もつとも能力が普遍的なやつ」

「その仮説だと、つまり一位と最下位の異常性はマックスになるのか。そういえば、確かに上か下に突出したやつほど変な能力者が多かった気がしなくもない」

「やーい、異常者異常者ー、超異常者ー」

「お前も俺に限りなく近いんだぞ？」

「……」

「ああ」

とか、



「人間の魂つてのは、どこにあるんだろうな」

「またそんな抽象的な。脳でしょ」

「いや、思考する器官と魂がイコールで結べるとは限らないんじゃないか？」

「僕、魂の定義とか知らないから、なんとも」

「ていうか、身体は脳を生かすために働かされているのか、脳は身体を生かすために働かされているのか、どっちだろうな？ より上位に位置する方に、魂つてのはあるんじゃないか？」

「どっちもどっちでしょ。脳は動けないし、身体は思考できない」

「あ、じゃあ全身に万遍なく魂が入ってるとか。足を取っても腕を取っても脳を取っても魂は欠けるってことでどうだ」

「でも脳は取ったら死ぬけど、腕は取っても死にはしないよね。死ぬってことは魂なくなるってことだから、やっぱり魂は脳にあるんじゃない？」

「それを言ったらお前、逆も言える。“身体を取ったから死んだ、つまりそれは身体に魂があるからだ”って言ってるのと同じだ」

「言われてみれば、脳を取った直後はまだ身体の方は生きてて、身体から魂がなくなるのは、脳が無くなったことによつて身体の方も死ぬから、だね」

「要は、全身魂だ」

「で結局、魂って何？ 美味しいの？」

「少なくとも人間の魂は不味いだろ」

「悪魔は舌が悪いね」

とか、

ぶつちやけ意味不明過ぎる会話である。なかばこじつけだし。

時間を潰すためだから、意味なんてどうでもいいんだけど。

やがて会話のネタもなくなり、お互い口を開かなくなつてから五

分ぐらい経ったあたり。

ようやく終業のチャイムが鳴る。教室のドアが開き、クラスメイ  
ト達が、俺達に様々な表情や感情、言葉を向ける。

ある者は哀れみ、ある者は共感。

ある者は卑下、ある者は苦笑。

多種多様だが、共感と哀れみの表情が多いのは、ここがおちこぼ  
れクラスであるからだろう。

大抵のやつらは、俺や行地に負けず劣らずの境遇だ。一部の見下  
す人間は、この中では能力の強い者か、あるいは自分がおちこぼれ  
だと認めたくない者。

どれにしる、皆等しく滑稽な人間である。

その中には例の妹似の美少女、奈々乃<sup>ななの</sup>、美羽<sup>みう</sup>も含まれるわけで。  
調度、出てきた奈々乃と目が合う。

奈々乃は数秒わたわたしてから、ペコリと九十度、よしコイツの  
あだ名は三角定規に決定しよう、と血迷うぐらいには綺麗な九十度  
別に会釈でいいだろ。

「では」

とだけ言い、ぱたぱた去って行ってしまふ。おそらく女子更衣室  
に向かったのだろう。次は能力測定の授業だからな。

そんな俺と奈々乃の微妙なやりとりを、眉間に皺を寄せて観察し  
ていた行地は、

「り、良人が……お、女の子と、仲、良く？ ……実は……あの子  
は男だとか？」

パンツ。

「はたくぞ」

「過去形だよ！」

パパンツ。

「い、痛っ！ 何でまたはたくのさっ！」

「はたくつつつたる？」

「未来形でもあったんだ……」

不満そうに俺を睨む行地。

そりゃ、んな失礼なこと言われたら怒るわ。

「おい、どクスコンビ」

又ツと、渋面の担任教師火雷が教室から出てくるなり俺達を睨む。おつかねえ。視線だけで虫とか殺せそうだ。

あの目は絶対に何人が殺っている目だな。うん、絶対そうだ。阿修羅も引く阿修羅顔だ。

「……今、俺の顔見て何を思った？ どクス」

「天使のような優しさと包容力に満ち溢れた、いや、もはや女神的に素晴らしく神々しい阿修羅顔だと思っただけであります、教官」  
ガッツ。

「ギャツ」

「肝心なところで正直なやつだな teme は！」

いってえ、殴られた。

能力は使用していないが、それでもこの筋肉馬鹿、これで手加減しているらしいのだから、一体どんな腕力してやがる。

「まあいい、次は能力測定の授業だ、服を着替える。言っておくが遅刻したら……分かってるだろうな？ サボるなんてもつての他だ！」

ニゴオオ、満面に笑む火雷。ある意味怒った顔より何倍も怖い。

俺と行地は、互いに目を見合わせ、

「「サー、イエッサーであります！ 教官殿！！」」

「良い返事だ！ 褒美に後で拳を一つくれてやる！！」

……どうしろと？





「ぎいあああああああああああつっ!!」

能力測定 of 授業中。

火雷からいに連行されていく悪友、火巻かまき 行地ゆきちを、俺は体育座りで見送る。

「た、助けて良人！ 殺される！ 殺されるっ!!」

学習能力の備わっていない哀れな悪友に、俺は親指を立て、

「グッドラック」

更に親指を反転し下に向け、

「地獄で会おうぜ！」

「なんでそんな良い笑顔で……」

そこで行地の絶叫は途絶え、代わりにドゴオドゴドゴンッ、行地のすぐ横にある測定器を連打する火雷の拳。

普通に爆風が行地に直撃している気もするが、そこはそれ、さすが凄腕教師にして超能力者、ちゃんと深手は負わないよう調整している。大事はないだろう。

うん、大事はないだろう、きっと。大事は、ない、はず。

……。

南無南無。

クラスメイト達の合掌と爆音が鳴り止み、こちらに戻ってくる担任教師。バツクの煙が妙にマッチしている。

かつて測定器だったソレが『測定不能、測定不能』とピーピーわめいている。

「こんな感じだ」

どんな感じだ、とは口が裂けても言えない。クラス一同引いているが、全員ピツと、

『サー、イエッサーであります!!』

軍隊ばりの敬礼である。ここ三週間ですっかり染み付いてしまっていた。

それから一人ずつ能力の測定が行われていく。つっても所詮は落ちこぼれクラス、全員が全員E判定ばかり。ランクはS、A、B、C、D、Eの六つあるが、そのうちのEだ。

更に“測定不能”というのもあるが、これは論外だろう。それ即ち“超能力者”の域である。

軒並みA級能力者以上の集う特級でも数人しか存在しない“超能力者”。そんな法外な力をもってしなければ辿り着けないランク“測定不能”。

通常の間では、夢に見ることすらおこがましい、天より上のランクだ。ましてやこんな雑魚の集まりが出せるはずもなく。だからこそだろう、今日このクラスの能力測定は驚愕の結果となる。

出てしまったのだ。“測定不能が。しかも数人”。

測定不能一人目、あじぎ 篤木 あじち 庄土。

「ふむ、軽くやるかの」

篤木 庄土。

その学生とは思えない、老練の兵士のような悟った雰囲気と、その学生とは思えないオッサン顔が特徴の大柄な男子生徒だ。

というか本当にコイツは生徒なのだろうか。あの白髪交じりの毛色は生徒のものなのだろうか。

年齢査定って案外簡単なのかも的なことを邪推していると、クラスメイト達の間になじめがはしる。何事かと皆の視線を追うと、それは篤木の身体に集中していた。それを見て、俺も少し驚く。

あの独特の光方は、念粒子か。

念粒子は通常、人の目で視認することは出来ない。それが、こうして目に見えるほど、念粒子の凝縮された光の粒があいつの全身を

覆っているのだ。こんな芸当、訓練したって到底出来るものではない。

こいつはもしかして、もしかするかも知れない。

「篤木流拳術道場師弟、篤木 圧土、いざ参らん！」

何だか仰々しいことを言い放ち、凄まじい踏み込みを見せる篤木。踏みしめた地面が掘り返されるほどに、力強い豪走。「あのどくズはグラウンド整備の刑だな」と火雷が呟くほどに、力強い豪走。計測器は一体、どのような値を示すのか、クラスメイト達から期待の眼差しが向けられる。

「喰らえい『<sup>ドレピングパウダー</sup>筋骨流粒』、必つさ……ぐおおおおおおおつっ  
！！」

ずざあああああああああああああつっ。

自らの踏み込みで砕いた地面に足を取られ、思い切り地面を滑る篤木。なんとも素晴らしいスライリングを見せてくれるじゃねえか。軽く測定器を通り過ぎていったが、大丈夫かあいつ。

「ぐおおおおおおお！ 皮が！ ワシの皮がああああああ！」  
この日から篤木のあだ名は“摩り下ろし大根”になったという。

『測定不能、測定不能。能力を使用して下さい、能力を使用して下さい』

測定器が嘲笑うかのように鳴り響く。

測定不能二人目、彦星<sup>ひしほし</sup> 香苗<sup>かなえ</sup>。

「ツッチー……もう少しやりようはなかったですか？」

「む、むう、すまぬ……。少々露骨過ぎたかの……」

「やり過ぎです。馬鹿丸出しです。部下失格です。豆腐の角に小指



ぶつけて爆散すればいいです」

「うう、殺生じゃ、香苗殿」

何を話しているのかは聞き取れないが、シユンと落ち込む篤木。まあ、あの二人はいつもあんな感じだ。

それにしても、同じ敬語口調でもえらい違いだな、彦星と奈々乃は。彦星の言葉には常に毒が塗つてある。

「仕方ないです。香苗がE判定の手本を見せてやるです」

「指導鞭撻の程を願う、香苗殿」

ピツ、と巨漢の篤木が超小柄の彦星に敬礼する様は、なんとも壯観である。どうでもいいけど、何故あんなに敬礼が似合うんだ篤木。本当に老練の兵士なんじゃないか？

「では、行くぜです！ 『テレバシーボディ異信伝身』！」

声高々に妙な掛け声を上げると、一転静まり返り、目を瞑る。

集中しているのだろう、周りの景色と一体化しているかのような自然体……って、あ？

彦星の姿が消えてしまった。本当に景色に溶け込んでしまったのか、どこにもいない。ついさっき立っていた場所には足跡だけが残っている。

「……はーっ……はーっ……」

しばらくの時間が経ち、パツと姿を現す。何故か肩で息をしているが、何がしたかったのか全く分からない。

「しまったです！ 香苗の能力は完全受動型です！ 放出とか不可能です！」

完全受動型？ そんなもの聞いたことがない。そもそも、例え攻撃不可能な能力でも、その能力によって何かしらの変化さえ与えれば測定は出来る仕組みのはずだ。

何はともあれ『測定不能』の機械音が鳴る。篤木と同じで、この場合の測定不能はE以下なんだろうな……。  
「ご愁傷様。」

測定不能三人目、奈々乃ななの美羽。

「はわわわわ」

はわわじゃねえ。

何がそんなに彼女を不安にさせるのか、キヨロキヨロ右見て左見て右見て、よしコイツのあだ名を横断歩道にしよう、と血迷うぐらいには拳動不審だ。

「え、ええと、お、お手柔らかにお願いしますっ」  
ペコリ。

おい、ついに測定器にまで挨拶し始めたぞあいつ。いくらなんでもテンパリ過ぎだ。

くそう、イライラする。ああ、イライラする。

あの顔であんなに不安そうな顔しやがって、あああイライラする！  
俺は見兼ね、「落ち着けアホ」と声を掛ける。

「あ、はい間違えましたっ。お手柔らかに参りますっ、ですね」

頑張りますっ、とでも言いたげに、胸の前で両手をグツとする。

いや、お嬢さん、そういう問題じゃなくてだね？

というか、お手柔らかに参りますって何だ。あれか。手加減しませぬ的な意味合いか。

なんにしてもアホな子である。

再び前を向き、測定器と相対する。

奈々乃は両手を前に出すと、念粒子を練るために集中する。あの構え方は、おそらく放出系統だな。

にしても、へえ、集中力はなかなかのものだ。

「えいつ」

ちよろちよろちよろちよろちよろちよろ。

威力はミソカスだがな。

小さな掛け声と共に、奈々乃の目の前の空間から放出される水流。いや、あれを水流と呼ぶのはおこがましいか。

ホース程度、いやいや、ジョウロ程度、いやいや、あれはそう、もはや湧き水のレベルだ。

あれで一体何をしようと言うのか。お花さんにも水をあげるつもりなのか。

「んんんっ」

力を込めているようだが、特に水の出が増すわけでもなく、相変わらずちよろちよろな湧き水。

これは、ど級の低能力だ。見るに耐えない。

だが、奈々乃の足元の水溜りが、それなりの大きさに成長し始めた頃。同じく、見兼ねた担任教師が声を掛けようとした頃。

ザザザザザザザザザッ。

蠢いた。水溜まりが。

水溜りだったものは、奈々乃の意志に伝えるように、その形を整え始める。

まず半径五十センチ程のドーム状の水溜りが出来上がり、水のドームは徐々に徐々に流動していき、何かの形を模そうとピチャピチャ蠢く。

校舎が出来、体育館が出来、寮が出来、窓が出来、木が出来、人が出来、徐々に徐々に“あるもの”を模していく。

これは……ちよつと凄いな。思わず感心してしまう。

『おおー』

クラス一同も感嘆の声を漏らす。ほう、と火雷が口の端を上げているのだからビックリだ。

そして、完成する。

奈々乃が水で創造したもの、それは、

「“ここ”か」

つまり、異能力者研究兼育成機関『みとがくえん神屠学園』の完全模写だ。

ちゃんと人や鳥まで動いていて、校舎の中まで形作られているところが凄い。

そして驚くことなかれ、これを何も見ずに造ったということは、

“『神屠学園』の構造を完璧に記憶している”ということである。

これだけ大きな学園を完全把握だ。それがどれだけ途方もないことかは考えるまでもない。

「で、出来ました。これが私の能力、『ビュアドール愚天使』です」

ちなみに、特徴ある能力には、“能力名”が授けられることがある。命名者は学校の教師や親、師、友人と様々で、能力だけでなく、その能力者本人の人柄や本質にちなんでいることもよくある。篤木と彦星の叫んでいたアレもたぶん能力名だろう。

『ビュアドール愚天使』……か。

命名者は一体どういった意味を込めたのか、特に意味はないのか。まあ、もし意味があったとしても、あまり良い意味では無い気がする。

……何でもいいか。

気を取り直し、再び奈々乃を見やると、おっと、目が合ってしまった。

やりましたっ、とでも言いたげに胸の前で両手をグツとする。

いや、しかしお前、測定器には何の変化も与えてないからな？

『測定不能、測定不能。能力を使用して下さい、能力を使用して下

さい』

「はわわわわ」

はわわじゃねえ。

どれだけ記憶力が良かろうと、やっぱりアホな子はアホな子だ。

測定不能四人目、火巻 行地。

「ここからは僕のスーパー行地タイムさっ！」

「お前、それ言ってて恥ずかしくねえ？ てか今までどこ行ってた？」

「ずっと気絶してたよ。まったく酷いじゃないか見捨てるなんて」

「てか生きてたんだ」

「酷いっ」

「地獄は楽しかったか？」

「勝手に死んだことにしないで」

「逆に何でまだ生きてんの？」

「酷いっ」

一通りの馬鹿会話を終え、測定器の直線状に立つ行地。

ちらちらとこちらを見てくるのが腹立たしい。なんだあいつ。殴ってほしいのか。

ギロと火雷に睨まれ、ビクツと前を向く。しっかりと調教されてしまっている。早く始めないコイツが悪い、というか大体いつもコイツが悪い。

すーっはーっ。

大きく深呼吸をし、右手を構える行地。なんか様になってはいるが、認めたくないの認めません。

コイツの得意能力は、『属性能力』の中でも特に威力の高い炎属性。

『属性能力』つつうのは、火や水などの自然物を操る系統の能力



破壊の爪痕を残す。  
灼熱の焼痕を残す。

愚鈍に、重厚に、圧倒。  
暴虐に、暴拳に、暴走。

測定器なんてちんけな小物は、風に吹かれた木の葉のように舞い散り。

常識なんてちんけな現実には、悪夢に囚われた病人のように舞い踊り。

その威力は枚挙に暇がない。

皆、啞然とする。

あの火雷ですら目を見開き思考停止している。

無理もない、知っていた俺も、行地ですらも愕然としているのだから。

「……あ……あ……」

火炎の能力者は、その目に何を映しているのか、酷く怯えていた。そして、

水操の能力者は、その目に何を映しているのか、酷く笑んでいた。……なんだこいつ？

「！ くそっ」

我に返ったのか、火雷が咄嗟に念粒子を練る。

両拳に爆炎を宿し、全身に雷光を纏い、俊足の超能力者は、まだ歩みを止めない特大火球に向かって特攻する。一瞬呆けてしまったとはいえ、この判断力はさすがエリート暴力教師と言ったところか。アレを止めなければ、更に被害は拡大してしまう。

不幸中の幸いにして、火炎弾の速度は自転車並。あの超能力者教

師のスピードにかかれば、追いつくことは容易い。

予想通り、火雷は火炎弾の後ろに回りこむと、拳の炎を一層強め、手加減なしで殴りつける。おそらく、一番脆い箇所を正確無比に。

ズドンッ、

一回目のクリーンヒット。

ズドツズドン、ズゴッ、ガゴッ、

二回目、三回目、四回、五回、六回七回八回九回、十、十一、十二、十三十四十五十六……、

一発でトラック一つを破壊出来そうな重い烈拳を、何度も何度も、何度も、加速度的にジャブは速くなる。

衝突音が、ドゴッドゴからドドドドに変化する頃、ようやく火炎弾全体をひび割れが覆いつくし、爆裂する。

チュドオオオオオオン、という轟音に、皆安堵の溜息をつく。力と力が相殺されたことにより、爆発は今の程度で済んだ。高等部の校庭にばかりクレーターが出来てしまったが、まずは脅威が去ったことに胸を撫で下ろす。

「修繕費とかヤバイんだろうなあ……」

どうでもいいことを嘯き、自信を落ち着かせる。いやどうでもよくはないが。

ところで火雷は大丈夫だろうか。いくらヤツでも、あの爆風に巻き込まれればさすがに……。

その心配は杞憂に終わる。

「あつちーな、チクシヨウ！ くそっ、どうすんだよこの背広、使いものにならんぞ！ 高かったんだがなあ。後であるアホに拳と請求書叩きつけてやらんと……。まったく手の掛かるとクズめ！」

ブツクサ言いながら、何事もなかったかのように、いつもの渋面



で炎の中から出てくる。

今ならこの人を英雄と呼んでやってもいい。

当の本人、行地はというと、

「……………！……………あ……………！……………ああっ……………！」

恐怖に支配された顔で、過去の事件でも思い出しているのか、うずくまり何事か呻いている。

仕方ないやつだ。ちよっくら気付けどもしてやろう。

「おーい、こら起きろー、行地さーん？」

とりあえず頬を掌で往復しておく。

スパパパン、うん、いつもの行地の頬だ。実に良いはたき心地で。

「いたっ、いたたたたた、痛い痛い痛い」

「ほれほれほれー」

スパパパパパパ、

「ちょ、おまつ、いた、待て、痛いって、い、いた、や、やめ、痛い痛い、やめろ、いたいたいた、やめろーあああああああああああ  
あああ……………！」

あ、キレた。

「うおつとと。貴様の攻撃なぞ当たらんよ、フハツ！」

ヘナチヨコパンチが飛んできたので、軽くいなしておく。はん、  
蠅が止まって見えるな。

「おま、良人、お前！それが傷心中の幼馴染に接する態度！？」

「ふっ、手を差し伸べてやっただけさ」

「ビンタしてただけでしょ！？」

「いや、見ようによつては手を差し伸べていたようにも……………」

「見えないっ！」

「そりゃただの往復ビンタだしな」

「開き直るな！」

よしよし、ノーマル行地復活だ。

まあ全身擦り傷だらけなことを除けば無傷だな。俺は行地の身体に怪我が無いかを確認し、右手を差し伸べてやる。

「ほれ」

「……え？ あ、ああ、うん」

虚をつかれたのか一瞬驚き、俺の手を取り立ち上がる。まったく世話の焼ける阿呆め。

行地は落ち着いたし、火雷は生きてたし、まあ良かったが……さて。

問題は、この目の前のクレーターだ。

どうして行地の能力が暴走した？

## 四話

神屠学園、一年十五組所属、火巻 行地。

能力名『いい火滅』。感情の波に同調し、その威力を高める。通常の火力は市販ライター程度。危険度ゼロ。過去の大量殺戮“紅海事件”の加害者。その頃に大きな心的外傷を負う。

「ふん……紅海事件、か」

夕日に照らされた室内。一人の洗面教師が、ただでさえ渋い顔に、また一つ皺を増やす。また一つ苦悩を増やす。苦渋は彼の原動力であり、また重圧でもある。

……俺のどクズ生徒どもが、妙なことに巻き込まれている。

火雷は、違法にアクセスした神屠学園データベースを睨みつけ、思考する。

……ようやっと学園暗部の情報をつきとめたはいいが……どうなってやがる。

今日、火巻の能力が暴走した。

何故だ？ この情報を見る限り、確かに火巻が“紅海事件”の加害者だというのなら、あの火炎弾の威力にも頷ける。だがこの数値を見る限り、ここ数年の火巻は落ち着いていて、あれだけの暴発を起こすことは有り得ない。

元々コントロールが利かなかつたため、多々暴発することはあったそうだが、だからといってあそこまでの暴発を引き起こすことはないだろう。

誰かが裏で糸を引いていない限りは、か。

ここは、特別指導クラス準備室。

神屠学園は、一クラス一組から十五組に分かれていて、その中でも選りすぐりの低能力者を集めたのが、“負け組み”と揶揄される特別指導クラス、十五組だ。

特別指導クラスの担任は、一人につき一つの準備室が与えられている。ここならば学園の目が届かず、かつ学園内部から情報を漁ることが出来る。更には、火雷の私室としても重宝されていて、部屋のあちこちには特製の監視カメラや警備装置、ロック、ブービートラップ、迎撃システム、ジャマー、あらゆる対策が施されている。烈拳の喧嘩屋は、存外に器用なのだ。

準備室という名の城で学園の情報を漁ること数年。

学園という名の人体実験所で暗部の情報を漁ること数年。

少しずつ、徐々に、地道に、微細に、淡々と、学園の裏を、暗闇の断片を、収集してきた。

そしてついに積み上げた。塵の山を。

ついにつきとめた。学園のデータベースを。

――確かに俺は、一つ一つこの手で、やつらの目を掻い潜り、確実に情報を集め、このデータベースにアクセスするまでに至った。他にも、いくつかの裏情報も入手している。

だが妙だ。何かが引っ掛かる。何かが不自然だ。何か得体の知れない悪寒を感じる。

菌茎に刺さっていた小骨が、実は超小型時限爆弾であるかのように。

腕に留まっていた蚊が、実は次世代生物兵器であるかのように。

――俺はどこか、決定的に道を間違えてはいないか？

火雷の恐ろしさは何も、超能力者の域にまで達した戦闘力や、かつて鬼童とまで謳われた知能や行動力だけではない。その気性の荒さ、豪胆さ、大胆さ、野生さ、本能、カリスマ、それらが混同さ

れて形成された、恐ろしいまでの勘の鋭さにある。

……いや、さすがに気のせいかな、いくらなんでも心配性過ぎだな。俺は完璧にやってきた。見落としは無い。例え多少の穴があつたとして、そんな小さな穴を埋めるぐらいなら目の前の宝箱に向かつた方が有益だ。これはその程度の杞憂だ、気にすることは無い。

だが、そんな勘の鋭さをもつてしても、学園の卑策からは逃れられない。

火雷は学園のデータベースを読み進める。学園の垂れ流す、無味無臭の毒ガスに首を傾げながらも、決してそれに気付くことはなく、いつの間に脳が、学園の垂れ流す毒電波に侵されていることに気付くことはなく。

火巻 行地についての秘匿情報を一通り読み終わり、次の項目に目を移す。

篤木 あしき 庄土 あしぢ  
彦星 ひこぼし 香苗 かなえ

いつも一緒にいる二人組みの男女。

この二人のプロファイルは前々から調べてはいた。

学園の至るところに残されている痕跡を辿ると、何故かこの二人に終着することが多々あるのだ。

だがそれに反し、ベースに刻まれたデータには何の変哲もない。いや、いくらか奇特な人世を歩んではいるが、学園の根幹に関わるようなコレといったものはない。

そもそも奇特な人世なら、十五組のほとんどの生徒が歩んでいる。そういうクラスなのだ。

篤木と彦星のことは、とりあえずは保留し、今はとにかく情報の

インプットにいそしむ。思考することならいつでも出来るが、データベースにアクセスしてられる時間は限られているからだ。この機を逃してしまえば、次に拝める日が何年先になるのか分かったものではない。

それで本当に読めているのかどうか疑問に思うほどの速さで、P  
C画面はスクロールしていく。

火雷が今最も詳細を欲している生徒は、火巻、篤木、彦星以外にも七人居る。

戸川 とがわ 伊織 いおり。三年。

衣瓦 いがわら 轍之助 てつすけ。三年。

元次 もとつぐ 渡 わたる。二年。

織姫 おりひめ 祈 いのり。二年。

全員、特別指導クラスの生徒だ。

こいつらは篤木 圧土と彦星 香苗同様の理由で前々から目を付けていた。

さらに、特別不可解な特別指導生徒、

異無 ことなし 良人 りょうと。

奈々乃 ななの 美羽 みう。

そして……時旅 ときたび 葉 よう。

これらの情報は絶対に手に入れておきたい。

火雷は冷静に、迅速に、インプット作業を遂行していく。  
だが、

目の前に突如として現れる銀色。

「……あ？」

思わず間拔けた声が漏れてしまう。  
なんの前触れもない理不尽に、思考回路が途切れてしまいそうになる。

目の前の、正しく目の前の、“画面から飛び出ている銀色の刃”を視認する。

瞬時に理解する。

何者かのナイフが、PCを貫いたのだ。

怒りが沈殿する。冷静が沸騰する。

おい……おい、おい、おいおいおいどここのどクズだおいつ！！

もう少しで、数年探し続けていた学園の裏を、暗部の表を、やつらの尻尾を、捉えることが出来ていたかもしれない。

あともう少しで、あと一歩でつ。

そんな激動も一瞬にして冷やしてしまうのだから、なかなかどうして有能過ぎる。

火雷は刹那の間に感情を抑え、周囲を確認する。現状の把握に取り掛かる。

まず、どうやって侵入者は、“そもそも浸入出来たのか？”。

この部屋は既に俺の要塞と化している。そんなじよそこの機密機関よりは嚴重に、セキュリティは整えてある。異能力者対策も万全だ。この中で俺以外の能力の発動は出来ない。能力解除で部屋を覆っているのだから。部屋に浸入しようとするれば、必ず能力解除に触れなければならない。これに触れれば、数秒だが能力の発動が一切不可能になる。そんな状態で入ってみる、部屋内のセキュリティを掻い潜ることは絶対に出来ない。チャフ発生装置も、セキュリティの管理装置も、全部部屋内にあるのだから遠隔操作で弄ることは無理。電波遮断だって正常に働いているから、尚の事無理。大体、ただでさえ浸入経路は扉一つしかない。あそこのロックは一際嚴重だ。

窓も全て特殊念粒子ガラスで暗幕も閉めてある。もし能力解除が無スキルチャフかったとしても、もしセキュリティが無かったとしても、もし部屋のロツクを掻い潜ることが出来たとしても、そもそもこの俺が気付かないわけがない。虫一匹の反応だって感知できる。ましてや人間なんて気配の分かり易い物体を逃すはずが、あるわけがない。例え出来たとして、例えそれらの関門をクリアすることが出来たとして、いつこのナイフはPCを貫いていたんだ。こんなものが飛んでくれれば、俺でなくても気付くだろう。

次々と現状を羅列していく。

だが分かったことは、“分からない”ということだけ。

数々の侵入者否定要素は、目の前にある一本のナイフに敵わない。PCが破壊されたという事実には敵わない。

敵の能力も、正体も、どこにいるのかも、分からない。

しかし止まってはられない、呆けてはいられない。起きてしまったのなら仕方がない、分からないが、分からないなりに全力対抗してやろう。

気を取り直し、というよりも、なかば開き直り、敵の気配を探る。もしかしたら、気配を完全に絶つことの出来る、人間という名のバケモノが浸入して来ているのかも知れないが。

部屋全体をチリチリとした気が漂う。

いや、気ではない、念粒子だ。百戦に錬磨された能力者は、念粒子自体を、即席の触覚のように応用することも出来る。

……いない。

直後だった。死ぬと確信したのは。

「ごめんね」



……はっ？

「こうでもしないと良人は死んじゃうから。あんまり学園に踊らされないよう、気をつけて」

「だ、れ……だ」

声が干上がって出てこない。

悲壮に満ちた、鈴のような透き通った声が、火雷を困惑の穴に眨める。

苦し紛れの対抗策として、臨戦態勢に入っていた異能力を開放する。

だが、既に声とナイフの主は消えていた。

それは“逃走”というコマを跳ばしたかのようで。

それは“浸入”というコマを跳ばしたかのようで。

文字通り、手も足も出なかった。

それから何秒経っただろうか。

何分経っただろうか。

はたまた何時間経っただろうか。

ハッと、自分がまだ生きていることを認識した。認識できる、身体があった。

皮肉なことに、超能力者、火雷 京二は数年ぶりの安堵に満たされる。

「……く、くくっ、はっははは」

まだまだ俺も力不足ってわけか。  
こんなところでしくじるとはなあ。  
だが、

……こうでもしないと良人は死んじゃうから。あんまり学園  
に踊らされないよう、気をつけて。

なかなか興味深いことを聞いた。

踊らされていた、か。

はっ、お前こそ踊らされているんじゃないのか？

悔し紛れの、苦し紛れの独り言。  
特に意味はない。

果たして、今この時、俺は踊らされているのか。それともそうで  
ないのか。

「また一からやり直しだな」

教師は一人、自嘲する。

## 五話

今日の授業は惨憺たる結果に終わった。

校庭は抉られ、測定器は吹き飛び、ついでに教師の背広も吹き飛び、授業は中断された。被害総額がどれだけのものなのか、考えたくもない。

その後、火雷は二時間目以降の授業を全て欠席し、六時間目まで自習が続いた。

俺達十五組に、代替の教師は存在しない。“負け組み”の十五組は全ての授業を、一、二、三年、それぞれの学年につき一人の教師に任されているのだ。それはもう過酷な重動労だと言う。既にスケジュールに隙間すらない二、三年の十五組担任を借りることは不可能というわけである。

こう言つては悪いが、事の犯人である行地はというと、生徒指導室、生徒会、風紀委員会室、職員室、保健室、研究棟、火雷の説教部屋などをたらい回しにされた挙句、一週間の自宅謹慎という処罰が下された。

実に気の毒な話だが、『七日連休だつて、特別ゴールデンウィークだつて、っしやあああああ！』などと叫んでいたので心配は無用というものだろう。

土日の都合も合わせれば九連休だということに気付いていないところが、なんとも行地だ。

あれが本心から来る喜びなのか、空元氣から来るものなのか定かではないが。

事の直後、クラスメイト達が行地を見る目は、わけの分からないモノを見るそれで、わけの分からないモノほど怖いモノはなく。

実は、俺、ことなし異無、りよつと良人は、若干クラスで浮いていたりする。行地とは違つて。

だからこそ、ちゃんとクラスに馴染めつつあつた悪友が、少し、

少し気がかりだ。

九日後、行地は三週間足らずしか過ごしていないクラスの中で、また元のように、孤立しないでやっていけるのか……。

「……」

こんな心配するなんざ俺らしくもない、な。

俺は俺の思っているよりは俺らしくないやつなのかも知れない。

ちなみに測定の続きは、また明日やることになった。それに関しては、やはり憂鬱だな。

能力測定。能力者。その言葉に、良い思い出がない。

だってそもそも……俺は無能力者だから……。

「なあにをチンタラ歩いてるですか！」

「あぶねっ」

頭をひよいと下げる。

次の瞬間、俺の頭があつた場所をピンク色の何かが通り過ぎる。

そのままの勢いで前方に落ちたそれは、ファンシーな絵柄のプリントアウトされたりユックサクだった。見た目に反し、中にはギョウギョウに物が詰められていて、実に凶器である。

「あり、はずしたです。これはちよつと驚きです」

振り返ると、そこには大男が小学生を肩車している姿があつた。

……親子？ という言葉が脳裏によぎるも、すぐに違つと理解する。

巨漢の篤木あつき 圧土あつちが、チビの彦星ひこぼし 香苗かなえを肩車しているのだ。

「なんだ、親子か」

俺の口から出た言葉は、結局最初の回答だった。

「誰が親子ですか！ 失礼なやつです！」

篤木の上からワーワーわめき散らすサマは、誰がどう見てもガキである。

「へえ、挨拶代わりにこんなもん投げつけるのは失礼の内には入らないのか？」

言つと同時にピンクのリュックを投げ返してやる。

「ふんっ」

彦星を狙つたつもりだったが、リュックは咄嗟にジャンプした篤木の顔面に直撃した。そのままリュックを顔面に留め、器用に、まるでオットセイか何かのように顔面を駆使し、彦星に渡してやる。

……シールドだ。

「篤木……それでいいのかお前」

「主に全力で仕えるのがワシの喜びじゃ」

あまりの部下っぷりに軽く引く。部下というか家来か？

相変わらずヘンチクリンな凸凹コンビだ。

「で、お前はお前で何やってんだ？」

デコボコンビの影に隠れるように、こちらを窺っているソイツに声を掛けてやる。

「はわわわわ」

「はわわじゃねえ」

妹のそっくりさん、ななの みつ 奈々乃 美羽だ。

俺が気になったのは、なぜ奈々乃がこいつらと一緒にいるのかということ。

確か奈々乃は一年十五組の中でも一際目立たない生徒で、いつも隅で一人で本を読んでいるようなやつだ。名前を忘れるぐらい目立たない。

仲の良い友人がいるのか自体が疑問なのに、どうして全く接点のなさそうなデコボコンビといるのか。

「いえ、あのその、ちょっと……」

人と会話することすら慣れていないのか、ちらちらと助けを求めるように彦星を見る奈々乃。

仕方ないですという風に、

「少し話しがあつたから同行してもらってます」

話、か。彦星が奈々乃に話、か。

「……カツアゲ？」

「ちげえです！」

「よっ、と」

飛んで来るリュック。避ける俺。地面に落ちるリュック。落ちたリュックを投げ返す俺。顔面で受け止める篤木。主の元に帰還するリュック。

なんか変なサイクルが出来上がってしまった。いた。

「そういうことばっかしてっから疑われんだよ」

「だとしても失礼な発言だと思うですが……」

それにしても、同じ敬語口調なのに、やはり似ても似つかない二人だな。彦星と奈々乃。

「言動はともかく、なかなか良い反射神経です」

「どうも」

「……少し見込みありかもです」

「見込み？」

「いや、こつちの話です」

なんだその気になる言い方。わざとか、わざとなのか。

「そんで俺に何か用か？」

「用がないと話し掛けちゃダメなんですか？ 無能力者さんの後ろ向きな背中が見えたから声掛けてみただけです」

後ろ向きでない背中などあるのだろうか。前向きな背中を想像してみる。……うえ、首が逆だ。

いや、この場合の後ろ向きは心的意味での後ろ向きなんだろうが。というか一つ嫌なキーワードが聞こえた。

「無能力者、ねえ」

露骨に嫌な風に言ってる。

「あり、気に障りましたか？」

「……」

俺は篤木の上の彦星を鋭く睨む。わざと、怒っているという雰囲気醸す。

近くにいた生徒がこちらを見たのだろう、怯えた風に、そそくさ

と早歩きで去って行ってしまおう。

だが彦星は、特に動じることもなく呆れた風に、

「便利な眼力です。それが鎖国の秘訣ですか？」

なかなかどうして厄介なチビだ。

「はあ」

溜息を一つつき、肩を下げ、別に怒ってないのジエスチャー。

「こうでもしないと石が飛んでくるんだ。哀れな化け物の知恵だよ」  
もちろん比喩だ。

昔から、やられる前にやらなければならなかった。そんな境遇に居た。

でもやりたくない。ならどうすればいい？ 近づけなければいい。

「難儀なものです」

「難儀なものだ」

「誰でも得体の知れないものは怖いです。“怖い”と“脅威”は別物ですが、それらの区別がつかないのもまた事実。脅威のありそうなものはとりあえず叩いておきたいものです」

その通りだ。

だが“得体の知れない者”からしたら迷惑なものである。

俺は“無能力者”だ。

この言葉が示す意味は、即ち“人間以外の何か”ということ。

通常の間人は、いや、どんな生物でも、どれだけ素質がなくても、どれだけ落ちこぼれでも、必ず多少の念粒子は練ることが出来る。

知能の低い動物では無理かも知れないが、それは知能がないから無理だという話で、体の構造上、念粒子を練ることが出来る。絶対に出来る。生物学上、そうなっているのだ。論文だって発表されている。

だが俺には出来ない。

何故だか出来ない。

一度、なんとら研究所で調べてもらったことがある。

その結果、俺の身体には“内気”が一切流れていないのだそうだ。

火雷の授業でも言っていたが、念粒子は“内気”と“外気”を混合することによって生成される。“内気”は、全ての有機物に流れているもので、流れていなければならぬもので、だが俺には流れていない。

有り得ない存在なのだ、“俺”は。

“内気”が流れていない。それは“血”が流れていないようなものの。

そんな人間が、いや人間を模った何かが、気持ち悪がられないわけがない。

そんな俺は、負け組みの中の負け組み、特別指導クラスの十五組でさえ距離を置かれている人間だ。

いやまあ、行地とかいうアホもいるが、あいつは昔からアホだからな、きつと生物の構造とか理解出来ていないんだきつと。そういうことにしておく。

「香苗は、人形が喋ればそれはそれでステキなことだと思っんです」「不気味じゃないか？」

「人形に人権はないです。つまりやりたい放題、命令したい放題ということですよ」

そっちの意味かよ。

「篤木は人形扱いなんだな……」

彦星は応えない。代わりに篤木が誇らしげな顔をするだけで。

それでいいのか篤木。

「あ、そういえばです」

思い出した風に、

「ナツチー、先程の話ですが、後で電話でも話し合ってください」

俺をチラと窺い、奈々乃に目配せする彦星。人に聞かれては困る話だろうか？

ちなみに、彦星は相手のことを妙なあだ名で呼ぶ。“ナツチー”とは奈々乃のことだろう。確か篤木の場合は“ツツチー”だった気がする。



というか居たのか奈々乃。失礼ながら存在を忘れていた。

「はい、すみません……」

慌て、申し訳無さそうに謝る奈々乃。意味もなく申し訳なさそうな表情のやつだ。

二人の話が何なのか少し気になるが、まあいいか。あんまり人の事情に首を突っ込むものではない。その首をそのまま持つていかれてしまうことだって、世の中にはままあるのだから。

……。

それからしばらく、俺、彦星、篤木、奈々乃は無言で帰り道を歩く。いや彦星は歩いてないが。

うーん、気まずい。

大体、なんで俺がこいつらと帰らねばならないのか。篤木と彦星とは、別段仲が良いわけではない。クラスでちよくちよく言葉を交わす程度だ。奈々乃に至っては、今朝会話したのが初めてだ。

そもそも悲しいかな、俺はクラスで浮いてるわけで、一緒に帰る友達と呼べる友達なんて行地ぐらいしかいない。

なんか成り行きの一緒に歩いているが、というか家の方向が同じだから分かれるわけにもいかないのだが、こும்無言が続くとやるせない。

仕方ない、俺が話題を切り出してやるか。気になっていたこともあるし。

「なあ、奈々乃」

なるべく、なるべく自然な感じで、話し掛ける。

「な、なんでせうか？」

めちやくちや不自然に返されてしまった。

一体何が彼女をこんなにも急かしているのか、テンパっているのが一目で分かる。

「す、すみません間違えましたっ。なんででしょうか、ですね」「いやどうでもいいが……」。

気を取り直し、聞いたかったことを聞いてみる。

「なんでお前は俺の妹なんだ？」

「……………」

「どうやら俺もテンパっていたらしい。あっはっは、やべ。」

「異無殿、お、お主そのような目で奈々乃殿を見ておったのか……」  
「まず篤木がドン引きする。」

「さすが無能力者なだけあるです。奈々乃さんを脳内で妹化して弄んでいたんですか。怖いです。そんなだから友達がアホしかいないのです。あ、キシヨイからこっち見るなです」

次に彦星が毒を吐く。

「妹？ ですか？ 私が？ 異無さんの？ は、はわわわわ」  
「はわわじゃねえ。」

「まずい、非常にまずい。」

「これはまずい。思わず口が滑っちゃった。」

「本当は、『何でお前の顔は俺の妹に似ているんだ』的なことを言おうと思っただけなんだ。いや、その発言もどうかと思うが……。」

「くそう、話題の切り出しなんて慣れないことするんじゃないか！  
とにかく、一刻も早く弁解しなければ。」

「あ、あのだな。今のは違うんだ。そんな目で見ないでくれ。ちょっと慣れないこととしてテンパっただけというか、口が滑ったというか、いい間違えというか、前言撤回というか、なんつうか、あのその……」

「……………」

「おい？ 無視すんなこらちくしょう」

「ちょっと……」

「あ？」

「ちょっと黙ってほしいです」

「は？」

「いいから黙るです！」

聞く耳無しってやつか？

いくらなんでも、そこまでの扱いを受けるようなことじゃないだ  
ろ。

あまりの待遇に眉をひそめるが、だがしかし、俺もすぐに異変に  
気付く。

篤木も、奈々乃までもが、真剣そのものの顔で、何かに集中して  
いる。

彦星は目を瞑り、固まる。

どうやら能力を発動しているようだ。こいつの能力が何かは知ら  
んが。この集中ぶりは、能力測定時にも見たそれである。

何かなんだか全く分からないが、俺も三人に倣い、辺りに気を配  
る。

数秒の緊張状態が続く。

二十秒程経っただろうか。

彦星が、緊張を破るかのように、

「来ます」

呟く。

何がだ？ 何が来る？ 彦星は何を感知した？ どこからソレは  
来る？

右を見る。何も来ない。  
左を見る。何も来ない。  
前を見る。何も来ない。  
後ろを見る。何も来ない。

キーン、と音がする。

彦星はこれを察知したのだろう。

音が近付いてくる。音が近付くということは、音を発するソレが近付くということ。

だが、辺りを見回す限り、ソレは一向に見えない。

じゃあどこから来る？

答えは一つ。

上かつ！！

瞬時に直上を見上げ、臨戦体制に入る。

鞆の中から、自衛用に持っていた携帯竹刀を取り出す。伸縮式で、通常の竹刀よりも軽くしなやか、丈夫で扱いやすいミラクルな携帯竹刀だ。定価もミラクル的に高かった。

天に向けた目を凝らす。

何も来ない……。

「下ですよっ！！」

彦星の叫び声が聞こえた。

同時に、地面が割れる音も聞こえた。

ついでに奈々乃の悲鳴も聞こえ、篤木が地面を踏み鳴らす音も聞こえた。

けたたましい、化け物の鳴き声が聞こえた。

やっべえなあ。

## 六話

化け物。

まさしく化け物。

化物、化者、怪物、怪獣、怪異、怪奇、魔物、魔獣、そんな言葉がしつくりくる生物。

異無ことなし 良人りょうとは咄嗟に避けられないと悟り、携帯竹刀を下に向け、地下からの突撃を防ぐ。その衝撃で宙を舞うが、多少骨が軋むだけで致命傷ではない。

空中に身を放り出されながらも、異無の思考回路は冷静に回転する。回転させる。回転させることが出来る。

通常の間人ならば、何が起きたのかも理解出来ないだろう。理解するどころではない。

当たり前だ。例えば車に轢かれながら、轢いた車のナンバープレートトを、車種を、運転手を、冷静に分析できる人間はいない。

そもそも今の地下からの突撃で確実に命を絶っている筈だ。少なくとも、致命傷を負うか重い傷を負うか、どちらかでないとおかしい。通常ならば。

だが異無 良人は通常の間人ではない。無能力者である。

今回は奇妙なケースだが、それでも、だとしても、異無が過去にくぐり抜けてきた危機よりはいくらかマシというもの。

異無は、まず目を疑う。次に視神経を疑う。更に自分の脳を疑う。最後に現実を疑う。問題ない、全て正常。いや、現実は今昔から問題だらけだが、そんなことは今更である。

続けて、目の前に現れたソレの存在を理解するために、ソレの特徴を押さえる。

形状は三角錐。

先端が鋭く尖っていて、後部にいくにつれ徐々に太くなる。

どこが頭なのか、どこが背中なのか、どこが腹なのか、よく分か

らない。

身体の表面は何か硬質な物質で固められている。金属だろうか。銀と黒を混同させたような色合い。

赤く巨大な瞳が全身のあちこちについている。数は十二。

最後部からは触手のような、いや実際に触手なのだろう。銀色の、しなやかでムチのような触手が数本生えている。数は目玉の数と同様に十二本。

全長は五メートル前後。横幅は、最後部が約二メートル。

まとめると、銀色の三角錐に、無数の瞳と触手が付随した化け物だ。

こんなものが存在しているのか。こんなものが存在してしまっている。こんなものが存在してしまっていた。

三角錐状のソレは、キイイイイ、と針金で金属を引っ掻くような金切り声を上げる。声、なのかどうかは少し怪しい。それ以前に口が無く、どこから音を発しているのか謎だ。

「魔獣、か」

ぼつり、と。

ソレの存在を理解し、ぼつりと呟く。

同時に、地面に激突する寸前まで接近する。このままでは身体を強く打つ。それは避けなければ。

異無は一転、二転三転、衝撃を吸収するため自ら転がり、最終的には勢いを利用し立ち上がる。携帯竹刀はしっかりと手に収まっている。

すかさず携帯竹刀を構え、敵と対峙。

ここまでの動きは高度に洗練されていて、だが全く無駄が無いというわけではない。研磨されてはいるが、どことなく荒削り。

それもそうで、異無は何か特別な訓練を積んだわけでもなく、軍

隊経験があるわけでもない。

ただ戦いなれている、というだけ。ただ場数を踏んでいる、というだけ。

一口に言つと、異無は喧嘩が恐ろしく強い。

「……魔界の産物がどうしてここにいる？」

異無は、黒銀の三角錐に語り掛ける。返事など返つてこないのは理解しているが、思わず聞いてしまう。コレがこんなところに在るのは異常だ。

魔界。

別名、粒子廃棄場。

そこは魔力の掃き捨て場。魔力が唯一受け入られる場所。

この世の終わり。万物の終着駅。万象の終電。

終わり続けている場所。

そして……いつかこの世が逝き着く場所。

“魔力”という名の“念粒子の亡骸”が逝き着く場所。

そして、魔界に住まうこの世ならざる“もの”を、人々は“魔物”と呼ぶ。

目の前に出現したコレは、魔物の中でも特に気性の荒い、“魔獣”という種。

「これは、へえ、驚いたです。いや驚愕です」

三角錐の魔獣を挟み、異無の立つ位置とは反対側で、未だしぶとく鷲木あしぎの肩に乗る彦星は、二重の意味で目を丸くしていた。

ひとつは、こんな何の変哲もない路地に、魔獣が現れたこと。

ひとつは、こんな何の変哲もない学生に、魔獣の不意打ちを防げたこと。

あれは明らかに直撃コースだった。

魔獣は異無の真下から現れたのだ。なんの能力も持たない学生が、防ぐことは有り得ない。



それこそ、篤木 圧土のような練達の兵士でもなければ。

篤木は、彦星が魔獣の存在を察知した直後から念粒子を練り、戦闘準備をしていた。全身を眩い光の粒子で覆っていた。粒の一つ一つが、念粒子を凝縮した塊だ。

三角錐が地上に乗り上げようとする瞬間。篤木は、巻き添えを食わないように、いや、彦星が巻き添えを食らわないように、刹那の間に飛び退き、回避することに成功していた。

篤木の能力名は『ドレーピングパウダー筋骨流粒』。『きんこつりゅうりゅう筋骨流粒』。

読んで字の如く、まさしく字の如く。念粒子の凝固体を血液に流し、筋肉に流し、骨に流し、細胞に流し、全身を強化する能力。

とても“負け組み”の生徒が持っていていいような能力ではない。

「……で、ナッチーはどこです？」

彦星の言葉に、三人の間に緊張が走る。

そつだ、この場に居るのは異無、彦星、篤木だけではない。もう一人、奈々乃という女生徒が居たはずだ。さつきまで、すぐ側に居たはずだ。

奈々乃はどこに行った？

嫌な予感に苛まれる。

さつきまですぐ側に居た。一緒に歩いていた。だが今は見当たらない。

奈々乃は平凡な十五組生徒。当然、魔獣の突撃、ましてや完全不意打ちの突撃を避けられるわけがなく。

つまり、奈々乃はしっかり巻き添えを食らってしまったのだ。

魔獣に掘り返されたコンクリートの瓦礫。このどこかに埋もれているはずである。

「あそこじゃっ！」

篤木が叫ぶ。

全員の視線が一箇所に集まる。

居た。そこに居た。

瓦礫に足を挟み、気絶している。おそらく頭を打ったのだろう。頭部から流血しているが、さほど重症ではなさそうだ。

あの傷は頭部が割れたためのものではなく、眉間の皮が裂けたためによる出血。眉間の傷というものは見た目に反して、さほど酷いものではないのだ。ただ出血量が多いため重症に見えるだけである。それよりも挟まれた足が折れていないかどうか心配だ。

なんにしても命に別状はなさそうに安堵する。

だが状況的に命に別状ありまくるため焦燥する。

近いのだ。非常に。魔獣の佇む位置に。というか足元。

三角錐の魔獣は、十二本中六本の触手を操り、頭頂部を天に向け立っている。

その足元に奈々乃は倒れていた。足元と言っているのか分からないが、とにかく魔獣のすぐ側。

六本の触手が凄まじい勢いで伸びる。奈々乃を串刺しにする気だ。

「ツッチー！」

「分かっておる、香苗殿！」

彦星の声を聞くや否や、地面を踏み鳴らし突撃する篤木。

篤木は早い。

だがさすがに追いつけない。

奈々乃と魔獣の距離は一メートルもないのだから。

反し、篤木と魔獣の距離は五メートルそこそこ。

間に合う道理がない。助けられる道理がない。

異無なしが居なかったならば、だが。

触手は“奈々乃を通り過ぎ”、全力で駆けてくる異無へと向かう。

「……っ!？」

「異無の動きは、圧巻の一言に尽きる。」

六本の触手の動きを全て予知し、把握し、的確に対処する。両手持ちの携帯竹刀で、二本を右方に払う。

残り四本。

払われた二本の触手が、違う触手をもう一本巻き込む。

残り三本。

竹刀を振るった右腕は振り切るが、左手は途中で竹刀を離し、肘間接をカクリと曲げ、肘打ちで一本の軌道を逸らす。

残り二本。

薄皮一枚で突き刺さりそうな一本を、全身を無理矢理に捻じ曲げ後方にいなす。

残り一本。

最後の一本は、わざと左肩に突き刺し、胴体はずさせる。流動する鮮やかな動き。

結果、触手は一本だけ左肩を貫通するに留まる。

この間、一秒も経っていない。

「いってえな、ちくしょう」

かなり無理のある動きをしてしまったため、空中で奇妙な体制になった異無が地面に倒れる。

左肩には触手が突き刺さったまま。

「凄いです……」

篤木の上で、彦星が呟く。

「これはとんだ掘り出し物です」

異無の動きを正確無比に捉えた彦星の瞳は、荒廃した土地の奥深くに新天地を発見したように、石ころだと思っていたものがダイヤモンドの原石であったかのように、期待の色に輝いていた。

「天晴れじゃ、異無殿」

ようやく魔獣の元まで辿り着いた篤木が、渾身の一撃を振るう。  
三角錐の赤い瞳が一つ潰れる。

真紅の粘液が噴出し真つ赤に染まる篤木だが、気にも留めずに右足で下方の瞳を蹴り上げる。二つ目の瞳が潰れ、キイイイイイイと甲高くわめく三角錐。

この系統の魔獣は大抵、目玉を全て潰せば死滅する。もし死滅しなかったとしても、視覚を潰せば相手の動きを避けるのは容易くなるし、そもそも瞳以外を攻撃したところで効き目が無さそうだ。

残りの瞳は十。反撃のための六本の触手は、伸びきっていて、数秒は戻ってこない。

ここまででは順調。

だが相手は魔獣。武装した一個小隊ですら勝てるかどうかの、魔獣。すんなりやられてはくれない。

黒銀の三角錐は、立つために使っていた六本の触手の内、三本を篤木に向かって伸ばす。

右、左、上、三方向同時攻撃。

強化された篤木の身体能力で、防げるのは二本まで。

右と左の触手を防ぐと頭を貫かれ、上と右の触手を防ぐと胴を貫かれ、上と左を防ぐと右から胴を貫かれる。

篤木に、異無のような芸当は出来ない。あんなアクロバットな動作が簡単に出来てたまるものか。

即ち防げない。避けれない。

だが篤木は、防ごうとも避けようともせず触手を無視し、魔獣の瞳を殴りつける。潰れる瞳。残り九個。

キイイイと三角錐は鳴くが、こんなことで攻撃を止めるほど魔獣はやわではない。

三本の触手が篤木を貫こうとする。  
百も承知だ。

「ワシの主はワシより強い」

篤木の肩の上に彦星の姿がない。

代わりに、篤木を守るように中空に佇む彦星が居る。

篤木の肩から前へ飛び降り、迫り来る触手に立ち塞がったのだ。小柄な体躯に容赦なく突き刺さる二本。

ドドドツと身体を貫く音。

鮮血が噴き出す。

血塗れになる彦星の身体。

正しくは、魔獣の鮮血で血塗れになる彦星の身体。

「てめえの攻撃は“返信”したです」

とても奇妙な光景。

魔獣が、二本の触手で、自分の身体を貫いているのだ。

三方向から串刺しにしている。瞳を貫いた触手は、二本が二本とも反対側の瞳もろとも貫いている。

つまり、計六個の瞳を潰した。

これで瞳の数は残り三つ。

「相変わらず理不尽な能力じゃのう」

「はあ、はっ……これ……め、めちゃくちゃ疲れるんですっ」

キイイイイイイイイイイ、

「串刺しになっただぐらいでキイキイうっさい！ 黙るがいいです！」

ドチュツ。

リュックサックという名の鈍器が、残された三つの瞳の内、一つを潰す。

キイイイ……。

「相変わらず理不尽な御方じゃのう」

感心したように、呆れたように囁く篤木。

残る瞳は二つ。

篤木側にある一つと、異無側にある一つ。

ここまでくれば後は容易い。

十個の瞳を破壊出来たんだ。たった二つなんてどうにでもなる。十二本あった触手の内、六本は未だ伸び切ったままで、まだ戻ってくるまでいくらかかかる。それだけあれば十分すぎる。残り六本の内、三本は自身を支えるために使っていて、更に三本は自らに突き刺している有様。手も足も触手も出ない。

ここから魔獣の逆転劇など有り得ない。どう考えても無理だ。

そんな考えが通用するほど、魔獣はやわじゃない。

ドドドドドドッ、

「！……っが」

完全な不意打ちで、地中から飛び出る六本の触手。

篤木の巨軀を貫通する三本の銀色。

なんとか半数はかわしたが、どう見ても無事ではない。右胸、太もも、わき腹を貫かれた。身動きが取れない、どころではない。貫かれたまま、乱暴に吊るし上げられる。

何がどうなっている？ 何がどうした？ 何が何なんだ？

三角錐の触手は全て使い物にならなかったはず。

じゃあ、これは何だ。この地面から生えた三本は何だ。

篤木は、朦朧とする意識の中、考える。そして一つの疑問に辿り着く。

……十二本あった触手の内、六本は未だ伸び切ったままで、まだ戻ってくるまでいくらかかかる。

果たして本当にそうなのだろうか？ 何か見落としていないか？

最初に異無を襲った六本の触手を見る。いっばいに伸びきり、未だ戻ってこないそれ。

やはり。案の定。

戻って来なかったのではない。わざわざ“戻さなかった”のだ。

触手は、そのまま更に伸び続けたのだ。

伸ばし、伸ばし、“地中を掘り進み”、誰に気付かれることもなく、篤木の後ろに回り込み不意を突いた。

『油断は自殺と同義だ』

過去、師に教わった教訓を篤木は思い出していた。

ああ……師は正しかった。

この世のものとは思えない、実際にこの世のものではない怪力で締め付けられ、傷口から尋常でない量の血液が吹き出す。およそ数秒で死に至るだろう。

ビチャビチャ、ビチャビチャと滴る赤。

雑巾を絞るように。

スイカを圧縮するように。

ビチャビチャビチャビチャ。

びちゃびちゃびちゃびちゃ。

「あ、ああ、……」

絶望する小柄な少女。

脱力する小柄な少女。

動かなければ。こういう時こそ、自分が動かなければ。主のピンチは部下の責任。部下のピンチは主の責任。責任を全うしろ。

念粒子を練れない。集中が出来ない。能力が使えない。そもそも今あの能力を使ったところでどうにもならない。

思考が働かない。

必死に集中力を搾り出そうとするが、目の前で腹心の相棒が大量の血液を垂れ流している中、集中出来ようはずがない。むしろ悲鳴を上げないだけ上出来か。

無理だ。

後ろから迫り来る、篤木を外した残り三本の触手に気付くこともない。

終わる。

死ぬ。

死。

……。

「俺を置いて話を進められてもなあ」



## 七話

異無は進んでいた。

進む。ひたすら進む。足を前に、必死に必死に。動かし続ける。

左肩を貫通している触手。先端は遙か後方の地面に突き刺さっているため、抜こうにも抜けない。つまり、異無は張りつけられた状態。

痛い。傷口がジユクジユク痛む。熱い。燃えるように痛い。

だが進む。進むたびに肩の傷口と触手が擦れ合い、叫びたくなる衝動に駆られるが、進む。

進まなければならぬ。速く。もっと速く。魔獣まで残り約二メートル。

あれを倒さなければ、死滅させなければ、ここにいる四人は死ぬだろう。

異無、彦星、篤木、奈々乃。

篤木と彦星は死んでも構わないが、いや構わなくはないが、出来れば助けたいが、それよりも奈々乃が気がかりだ。妹と同じ顔をした人間が気がかりだ。

もちろん、妹と奈々乃が別の人間だということは分かっている。

そんなの承知の上だ。奈々乃とアイツは全くの別人。似ても似つかない。

だが、見捨てられない。どうしても見捨てられない。

妹を助けることが出来なかった。妹を守りきることが出来なかった。だからこそ、奈々乃を見捨てることが出来ない。

今度こそ、あの顔をした少女をこの手で守りたい、守らなければ、義務がある。

実際、異無一人が逃げ出すことは簡単だ。なりふりさえ構わなければ、いつでも逃走は可能である。千切ればいい。

左肩を引き千切れればいい。

幸い、魔獣は彦星と篤木に注意を向けている。

幸い、左肩は貫かれていたため非常に脆い状態にある。なら逃げることは簡単だ。

だが出来ない。物理的には簡単でも、心情的に無理だ。

見捨ててなるものか。その一つの感情が、痛みを麻痺させ、異無を突き動かす。

後一メートル。状況は芳しくない。

今、篤木が地面から生えてきた触手に貫かれ、空中に吊り上げられた。

あれはまずい。

一応、これも何かの縁だ、あの二人もついでに助けたい。

この状況で、それは少し欲張りが過ぎるというものだろうが、欲張って何が悪いというのだ。

助けられる人間は助けたい。当たり前だ。

だがこのペースでは間に合わないだろう。

一メートルが百メートルにしか見えない。このペースでは間に合わない。

なら走ればいい。

異無は、貫かれた左肩を気にも留めず、両足に力を込め、思い切り走る。そう、走る。

そんなことをすれば、傷口と触手の摩擦は増し、狂いそうになるほどの激痛が襲うだろうが、お構いなしに走る。

ブチブチブチブチツツ、

筋繊維が壊れる音が聞こえる。

ブチンツ。

嫌な音だ。左手がブランと垂れ下がる。

肩が使い物にならなくなるかも知れないが、まあ仕方ない。

ブチユブチと肉が擦れる音に呼応するように、

ビチャビチャビチャビチャ。

篤木の血液が滴る音。

肉が擦れる音と血液が滴る音が、嫌なハーモニーを奏でる。

あと少し、あと少しで魔獣に、魔獣の瞳に、魔獣の弱点に、竹刀が届く。

「あ、ああ、……」

彦星が、あまりの篤木の惨状に、膝を折る。

大丈夫だ安心しろ、もう届く。今届く。

「俺を置いて話を進められてもなあ」

異無は、少女を安心させるように、皮肉を込めてそう言う。

助けを求める虚ろな目が、こちらを向く。

「ああああああっ！！」

右手に持った竹刀に渾身の力を込め、魔獣の瞳に突きを入れる。

ドチュツ。

赤い飛沫が舞う。

キイイイイイイ、という悲鳴。鳴き声。泣き声。

ドサリ、と地面に落ちる篤木。

大分出血していたが、大丈夫だろうか？ まだ間に合うことを祈る。

魔獣はまだ死滅しない。しぶといやつだ。

先程まで篤木に巻きついていていた触手が、彦星を襲おうとしていた触手が、一斉に異無目掛けて飛んでくる。

命の危機を感じ取ったからだろうか、恐ろしく速い。

魔獣の瞳は、まだ一つ残っている。それを破壊しない限り、この三角錐の化け物は暴れ続けるだろう。

ここで異無が死ねば、全員が死ぬ。それだけは避けなければ。

だが、残る一つの瞳は、異無のいる調度反対側にある。ここから回り込んで瞳を破壊するまでに何回殺されるか。それ以前に、左肩



崩れた場所が、溶けるように消滅していく。

あれだけ暴虐の限りを尽くした魔獣だが、案外アツサリと死滅していく。

表面の剥がれた三角錐はなんとも不恰好で、全身から赤黒い液体を染み出させている。なんというか、今更だが、非常にグロテスクだ。

異無の左肩を束縛していた触手は、もう無い。

自由に動かせる。といつても、左肩から先の感覚が無いのだが。

「ああ、疲れた。あああ疲れた。とりあえずは病院だな」

だが安心するのは早い。疑問は、まだ残ったままだ。

なぜ魔界の生物がこんなところに居るのか？

魔界は嚴重に警備されていて、魔物が抜け出せばすぐさま警報が発令される。即、討伐隊が駆けつけるはずだ。

そしてもう一つ。

なぜ魔獣は、奈々乃ではなく、異無を優先して攻撃したのか？

魔獣が奈々乃に触手を伸ばした直後に、異無は駆け出したのだ。

人間の足よりは、魔獣の触手の方が数倍速い。あれで間に合うはずがない。“だが間に合った”。

触手は奈々乃を無視し、異無に向かったのだ。なぜだ？

途中までは、確かに奈々乃を狙っていたはずだ。異無も、全力疾走しながらも、おそらく間に合わないだろうと頭では分かっていた。だからこそ“あの程度の存在”に肩を貫かれたのだ。こっちに向かってくることは有り得ないと油断したからこそ、突如軌道を変えた触手に反応が遅れ、肩を貫かれてしまったのだ。本来の異無なら、六本の触手ぐらいものともせず払いのけていたはずだ。

もし……。

もしも、それが異無を殺害するための策だとしたら、どうだろうか。奈々乃を攻撃すると見せかけ、異無を油断させ、殺すためだったとしたら？

最初から、異無を殺すために魔獣は現れたのではないのか？

異無が狙いだったからこそ、魔獣は最初、異無の真下から出現したのではないか？

いや……。

あくまで、もしもの話だが。

それに、魔獣にフェイントを仕掛けるだけの知能は無い。

だから、これはもしもの話なのだ。もしもの話は所詮もしもの話。自分の命を狙って魔獣は襲ってきた、なんて自意識過剰もいいところだ。

アホらしくなり、異無は思考を打ち切る。

そんなことより、一刻も速く手当してやらなければならない人間がいる。

……生きてるよな？

彦星に駆け寄られる篤木を窺い、その目が薄っすら開いていることに多少安堵する。

身体を三箇所も貫かれ、あれだけの血を絞りとられた。それに、あの怪力の締め付けによる損傷は、何も出血だけではないだろう。体中の骨があちこち折れているはずだ。少なくとも肋骨は数本いつてしまっているのは確実だ。

むしろなぜ意識が残っているのか不思議だが、それは篤木の能力によるところが大きい。

篤木は能力『ドレピングパウダー筋骨流粒』により、全身を活性化させているのだ。

骨を活性化させ血を生成、細胞を活性化させ治癒力向上、少なくとも血液を活性化させ、微量の赤血球で多量の酸素を運ばせる。

要は、自然治癒力を最大まで高めている。

便利な能力だ。これなら救急車が来るまで保つだろう。

異無は携帯電話を取り出し、救援を呼ぼうとする。  
「待つです」

篤木の傷口を確認すると、顔を上げて遮る彦星。  
さつきまでの悲壮に満ちた表情ではなく、感情を読み取ることの  
出来ない、無表情。

「救急車は呼ばないでほしいです。学園の医療班なんてもつての他  
です」

「はあ？ 何言っただお前。いくら篤木が丈夫でも、さすがにこ  
のままはずいだる。それにほら、こっちもこの通り」

ブラブラと全く動かない左肩を見せてやる。出血も結構酷い。奈  
々乃も一応怪我をしている。

「大丈夫です。それに関しては“こちら”で何とかするです」

そう言っつて、小型の通信装置を取り出す彦星。電波ではなく念粒  
子を利用したもので、逆探知や盗聴防止のための通信装置だ。

ボタン一つでコールをし、即応答する通信相手。

「……です。……下校中……。スカウト……。奈々乃……。突然魔獣

が……。です。……本当に突然……。撃退は成功……。それは分から

ないです。……篤木……。重症……。……至急救急班を……。……

……例の無能力者……。見込みありです……。……今すぐですか？ ……

……もう少し時間掛けても……。……はあ……。了解です」

何を言っているのかはよく聞き取れない。言葉の断片から判断す  
るに現状報告と救援要請、そして無能力者がどうとかいう話。奈々  
乃の名前も出てきた。

彦星は通信装置を仕舞い、溜息を一つつく。しゅしゅという風に、

「少し事情が変わっちゃったです」

「事情？ おい、その前にどこに連絡したんだ？ どこに救援を依  
頼した」

だが異無の言葉を無視し、そのまま続ける彦星。

「香苗としては、今日は手当てだけして見逃して、またの機会に勧  
誘でもよかったんですが。今、貴方とナツチーのことを報告したら、

人材はすぐにも欲しいとのことですよ」

「いや……言ってる意味が分からないんだが？」

「すぐ分かるですよ。とにかく……」

彦星は指を二本上げ、

「あなたの選択肢は二つですよ。“こちら”に付くか。記憶を消されて元の生活に戻るか」

「はあ？」

何を言っているのか全く意味が分からない。

「こちら？ 記憶を消す？ 元の生活？」

「決まりで、相手のことも尊重しないとイケないんですよ。香苗的には、めんどくさいから問答無用で連行してしまえばいいと思うんですが……とにかくどちらですか？ 香苗達の組織は極秘ですから。

勧誘を断られたら、記憶を消さなければならぬんです。大丈夫ですよ、手当てはしてからでもいいですよ。肩、痛そうですね」

「どちらか選べって……その前に説明を要求したいんだけどな」

彦星は、仕方ないとしても言いたげに溜息をつき、

「一応、勝手に詳細とか話しちゃダメなんですけど……いいですよ。理由も聞かされず、いきなり二択選べつても理不尽な話ですよ。要点だけ説明するですよ」

異無は、周りに誰か居ないことを確認する。誰も居ない。それ以前に誰か居たら騒ぎになっているはずだ。

そもそも、この日に限ってほとんど人通りがないのは偶然ではない。彦星も、それには気付いている。これだけの騒ぎがあつて、誰も気付かないというのは明らかに異常だ。学園の仕業か、それとも……。

「まあ、とにかく説明を頼む」

分かったですよと頷き、説明を始める彦星。

「まず、香苗達は『<sup>レジスタンス</sup>烏合の衆』という組織に所属しています。ツチーもこれの所属で……」

そこで、彦星の言葉が止まる。止めざるをえない。



驚愕に、思考停止する彦星。

誰だって、首に刃物を突き付けられては固まってしまっただろう。

「あんまり良人をたぶらかさないで」

「なっ……なん……」

「黙れ」

殺意のこもった声。その声音は、有無を言わず人を黙らせるのに十分に、圧倒的に、殺意的。

彦星の首に銀のナイフが突き付けられている。いつの間に、本当にいつの間に、瞬きもしていないのに、気付いたらそこにナイフがあった。

ナイフが皮膚に食い込み、一筋の血が流れる。

銀色の冷たい感触が、彦星の恐怖心を煽る。赤色の暖かい感触が、彦星の恐怖心を煽る。冷や汗も出ない。

「お前、今朝の……奈々乃を襲っていた……」  
異無が呟く。

ナイフの持ち主を見て、呟く。

そいつは特徴的な格好をしていた。今朝見た、あの白だ。

白い制服に、白い髪の毛。白く、きめ細やかな肌。腕には、白いアンティークな腕時計。白く、白い白。

なんだか天使のようだ。

そんな場違いな感想が頭をよぎる。

白い少女は、奇しくも、今朝異無と対面した時のように、彦星の首にナイフを突き付け現れた。

「いいからアンタはどっか行って」

淡々とした声で、単調な声で、どこまでも平坦な声で、むしろ意図的に声に感情を乗せないようにしているかのように、異無に言う。

なんだか従わなければいけない気がする。  
なんだか、従わなければ大変なことに巻き込まれてしまう気がする。

突然過ぎて意味が分からない。というか、今日一日で色々唐突に起き過ぎだろう。

朝は、奈々乃が追い詰められてるし、学園では行地の能力が暴走するし、帰りは気色の悪い魔獣に襲われるし、彦星に謎の勧誘を受けるし、そして、これだ。何なのだろうか。絶対厄日だ。

それで、コイツの目的は何なんだ？ どっか行って、って……俺に興味がないのか？

……あんまり良人をたぶらかさないで。

……いいからアンタはどっか行って。

……いや……俺を逃がそうとしている？ どういうことだ。

「お前は一体……」

「速くどっか行かないとこいつの首が飛ぶけど？」

彦星の首に、ナイフがいつそう食い込む。血の出が良くなる。

主の危険を悟ったのか、まだ薄っすらと意識のあった篤木が、何事か呻くが、何を言っているのか聞き取れない。

白い少女は、その行為に、首を切るといふ行為に、一切のためらいがない。やばい、あれは確実に殺る目だ。

「お、おいっ！ ちょっと待って、何がなんだかつ」

「十、九、八、」

カウントが始まる。

どうやら、これ以上問答する気はないようだ。

後、七秒でこの場を去らなくては、彦星の命が絶たれる。

一瞬、どうにか出来ないか考えるが、すぐにどうにもならないと悟る。逃げるしかない。

逃げる……いやまあ、それはいいとしよう。だけどまだ……。異無は、徐々に後退しながら、チラとその方向を窺う。奈々乃だ。自分が逃げるのは、まあいいとして、でも奈々乃もこの場に残しておくわけにはいかない。

「七……三、二、」

「……っ!?!」

飛ばしやがった!

一目散に逃げ出す異無。  
全速力で駆ける。

最後に、彦星の首から結構な量の血が飛び出していたのが見えた。

……やばいやばいやばい! あ、あの女! 正気か!?

「一、ぜ」

角を折れ曲がる瞬間、後方から、そう聞こえた。

間に合ったかどうか、いささか疑問である。

## 八話

「い、いつてえええええっ!!」

俺は消毒液のあまりの凶悪さに叫ぶ。麻痺していた左肩の痛覚が戻りつつあり、泣き叫びたくなる。

もう少し丁寧な扱ったときやよかった左肩!

「いつてえ、じゃないっ! 我慢して!」

ベッドの上の少女が、けたたましく怒鳴り散らす。

うわあ、怒ってらっしやる。めちゃくちゃ怒ってらっしやる。

コイツは例の俺の妹、ことなし異無 美唯だ。

現在、自宅。妹の部屋。俺はベットに腰を掛け、穴の空いた左肩を、美唯に治療してもらっている。

美唯には昔から、いつもこうやって治療してもらっていた。高等部に進学してから治療してもらうのは今回が始めてだが、昔は本当に酷かった。

小さい頃から俺はいつもケガだらけで、その度に美唯の世話になり、おかげで美唯の治療能力は非常に高い。年齢が上がるにつれ俺のケガは酷くなり、それに伴い美唯の実力も段階的に向上していったのだ。

というか元々医者のがんががあつたらしく、寝たきりになる前までは天才医少女などと呼ばれていたのだから凄い。医師免許だって持っているのだから、なんというか、インフレ。

なにせこいつは才能ゼロの俺とは違い、学園でも数人しかいない治療系“超”能力者の一人だったのだ。

能力名『ダスト・ワイヤー念末念糸』。糸状の念粒子と粉末状の念粒子を操り人体を縫合、再生させることの出来る能力。

大晦日に俺が適当に名付けてやっただけというのは内緒の話。天

才医能力者の能力名が、実は“年末年始”から来ていると知る者は数少ない。ちなみに治癒系能力者を、異能力者ならぬ医能力者と呼んだりする。

「ていうかどうやったらこんなことになるの！？ やつと兄貴も落ち着いてきて平和に青春送ってると思つたら……左肩に穴！？ はあ！？ びつくりだよっ！」

ある事件依頼、俺がケガして帰ってくるのがなくなったため、しばらく大人しかつた美唯だが、今日は久々にキーキーと元気であ

る。  
「だから階段踏み外したただけだつて言つてんだろ？」

「アホな嘘つかないの！」

「嘘じゃないぞ。階段の下に巨大なトゲが落ちてたんだ。誰の落し物だろうなー、あのトゲ」

「意味分らないよ！」

「あつはつは俺も意味分からん」

「何を開き直つてるの……」

うつむ、ご機嫌麗しくない。

美唯は、今でこそ寝たきりで医療能力が落ちているが、それでもそこいらの医者よりかは何倍も腕が良い。

ぐちぐち文句を言いながらも、相変わらずの手際の良さで左肩の傷口を治療していく美唯。

念粒子と薬剤を混合し、特殊に加工した粉末を傷口にまぶす。

癒着効果のあるもの、麻酔効果のあるもの、浄化作用のあるもの、細胞代替として使えるもの、様々な化合物粉末をテキパキと、最適な量で使い分けている。これ一つまみで耳を疑いたくなる値段がしたりするのだから目に悪い。

「まあまあ、機嫌直せよ。ほら、お土産にアイス買ってきたんだぜ？」

ビニル袋からハーゲンダッツを取り出し、ベットに取り付けられた食事用の台に置く。美唯鎮圧のための取っておきだ。

「肩に穴空いてるのに暢気にアイスなんか買ってたの!? 頭わいてるでしょっ!」

おかしい。余計怒りを買ってしまった。

「お気に召さなかったか。ストロベリー味探すのに二件回ったのに」  
「……まず頭の治療してあげようか?」

俺を見る視線が痛い。なんとというか、本気で心配げに言っているのが余計痛い。少しおふざけが過ぎたかも知れない。

呆れながらも、治療スピードは全く緩めず、傷口を念糸で縫合していく。これも粉末同様、特殊加工がされていて、赤の念糸、青の念糸、黄の念糸、色によって効果が違うものを数種使っている。

それにしても、本当に凄い。さすが超能力者にして天才医少女、通常では何時間も掛けなければならぬ重症がみるみる内に治療されていく。治療というか再生のレベルだねこれ。おそらく神経が切れてただるうに、麻酔で感覚は無いが、指先もちゃんと動く。

仕上げに包帯を巻き、

「はい、終わったよ。放つとけばすぐ直るけど、あんま動かさないでね」

治療開始から五分も経っていない。それでこの仕上がりのだから、なんとも超能力者である。

「どれぐらいで動かしてもいいようになる?」

「今日安静にしてれば、明日には問題なく動かせるようになるよ。さすがに激しい運動したら痛むけどね」

「おう、サンキュー」

「まったく……治療はさせておいて事情は聞くなって、都合良いねまったく」

その通りだ。

だからと言って、魔獣に襲われました、なんて言えるはずがない。余計過ぎる心配を掛けてしまうことになる。

魔獣を倒し、白い少女が現れ、その後、俺は全速力であの場を去

り、帰宅した。それから肩の応急処置をし、ある程度経ってから現場に戻ったのだが、嘘のように元通りになっていた。

穴の開いていた地面は綺麗に塞がれていて、掘り返された瓦礫は欠片も残っておらず、魔獣の残骸は消え失せていた。あの出来事が幻だったかのように、全部夢だったと言われれば信じてしまいそうなほどに、完璧に元通りだった。

だが肩の傷がそれを否定する。何もかも現実のものだったのだと、包帯に巻かれた左肩が物語っている。

神屠学園が証拠隠滅に動いたのか、彦星の言っていた『レジスタンス烏合の衆』とやらが動いたのか、はたまた別の組織かは分からないが。とにかく、あの現場に証拠隠滅するだけの秘匿性があったということだけは分かる。

『世界政府』か『協会教徒』の仕業とも考えられる。魔界を管理している連中だからだ。必然、魔物関連の事柄には深く関わっている。

もちろん、彦星、篤木、白い少女の姿はなかった。あの後どうなったかは知らないが、まだ彦星の首がくっついていることを祈る。そういえば救援を呼んでいたから、篤木は今頃『レジスタンス烏合の衆』とやらのアジトで治療を受けていることだろう。あの真っ白い女に刺され、命を絶つていなければだが。

というか奈々乃が消えていた。

そんなわけで俺は、現場確認後、急いで自宅に戻ってきた。連絡網を頼りに奈々乃が家に帰っているかどうか確かめるためだ。勧誘がどうか言っていたから、彦星達の組織に連れ去られてしまったのかも知れない。そういえば、あの二人と奈々乃が一緒に帰っていた理由はスカウトのためだったのか。彦星の通信中にもチヨロツとそんなような話が聞こえたし。

で、奈々乃の自宅に電話を掛けようとしたところで、妹の美唯に

見付かってしまい、こうして治療をしてもらったのである。

ちなみに、美唯は念糸を伸縮自在、自由自在に操れるため、遠くのものでも器用に動かせる。寝たままでも家内の状況を把握することだってできる。介護人も居ないのに家で一人でやっていけるのはこれのおかげだ。

「信じられないよ。そんなケガで行ったり来たりしてたんだから」  
美唯は、とある事件による後遺症で下半身の自由が利かない。更に心的にも酷い傷を負わされていて、神屠学園に近寄ることが出来ない。見ただけでも気が動転し発作を起こしてしまう。

俺は神屠学園が嫌いだ。大嫌いだ。美唯をこんな身体にした、あのイカレ野郎どもを今でも血祭りに上げてやりたい。それが簡単に出来れば苦労しないのだが。

そもそも、決めたのだ、もう危ないことには今後一切関わらないと。例え学園の手中に甘んじようとも。せめて残された美唯の笑顔は失いたくない。

「……兄貴、また危ないことやってるの？」

怒り心頭だった美唯の表情が一転、心配気な、泣きそうな顔になる。なんだかんだ言っても、常に相手のことを気にしているやつなのだ。

「いや、それは大丈夫。今回はほんと、ちょっと巻き込まれただけだ。俺から何か手出ししたわけじゃない」

「何に誓う？」

「婆ちゃんに誓おう」

「なんでそんな微妙な」

「お？ なんだお前、婆ちゃんなめんなよ？ すげえんだぞ、何でも入ってたぞ、婆ちゃんの知恵袋」

「別になめてないよっ」

「それより溶けるぞハーゲンダッツ。いらなら食っちゃまっぞ？」  
台に置いたハーゲンダッツを取り、美唯の手の届かない位置まで遠ざける。



「あつ、あつ、食べる食べる、かえしてって」

両手を伸ばして必死に中空をあおぐ美唯。……おもしれえ。

「ほれほれ、こっちだこっち」

なんだか楽しくなってきたので、アイスを右に左に移動させる。

ちなみに、小学生が女子にちょっかい出している図だということに気付いたのは、しばらく後のことである。

「ていつ」

パシッ、

「おっ？」

伸ばした念糸で絡め取られてしまった。小賢しいな小娘め。

「うわあ、少し溶けてる」

文句を言いつつも、めちゃくちゃ美味そうに食う美唯。

「うまうま」

「……」

「……何？ ほしいの？ 少しいる？」

しゅしゅといった顔で、小さなプラスチックの Spoon を差し出されてしまう。うっむ……。

「遠慮しておく。それはちょっとまずい」

「別にまずくないよ。めっちゃ美味しいよ」

いやいや、お嬢さん、そういう意味のまずいではなくてだね？

「いや、ほしいほしくしないで言えば、どちらかと言えばほしいが、いや、遠慮させて下さい。ここでその Spoon と無垢さに甘んじてしまったらなんだか引き返せない気がする」

「？ 変な兄貴ですねー？」

小首を傾げ、おどけたように言う妹。正しく妹。妹なのである。

だめだこいつ。根本的どころが小学生だ。ちなみに今こいつの実年齢は中三。一個下だ。

妹、美唯。クラスメイト、奈々乃。美唯のそっくりさん、奈々乃。奈々乃のそっくりさん、美唯。

美唯が変な丁寧語を使ったので、つい奈々乃のことを連想してし

まった。

こうして見ると、やはり瓜二つだ。生き別れの姉妹か何かなんじゃないかと本気で疑ってしまうぐらい。……いやそれはないと思うが。

「つと、そうだそうだ、奈々乃だ。電話だ電話」

マイファミリーとの邂逅ですっかり忘れてしまつところだった。

あいつの家に電話するために急いで戻つて来たのではなかったか。

「奈々乃？」

「ああ。クラスメイトの女子だ。ちょっと聞きたいことあるから電話するだけだよ」

「……お、女の子？ ……兄貴が、女の、人の、家に、電話？」

めちゃくちゃ疑わしげに言われてしまう。何を疑ってるんだこいつ。つ。

「その人、実は男なんじゃないの？」

「何で行地と同じようなこと言うんだお前はつ。俺だつて傷つくんだぞつ」

「ええ……。なんかごめん」

「いいんだ。別に」

どうせ俺はクラスでも敬遠されてますよ。昔からそうですよ。女なんかそうそう寄って来ないですよ。別に悔しくなんかないつらば。

まあ、そんなことは置いといて、電話だ電話。

一旦、美唯の部屋から出て、リビングにある家電の受話器を取る。壁に貼り付けてある連絡網で奈々乃の電話番号を見ながら、ピピピと押す。どうでもいいが、高校生にもなって連絡網で。

ブルルルと二回ほど呼び出し音が鳴り、ガチャ、

『は、はい、もしもしつ。こちら電話を承りました奈々乃 美羽でござりますつ』

ああ、これは確実に奈々乃だ。いや、声がどうかじゃなくて、受け答えのテンパリ方が実にあいつらしい。

ほつと安堵の溜息をつき、

「おう、奈々乃か？ 俺だよ俺。俺俺。俺だつてばさ」

『え、ええと、あの、……、はい、あなた様ですか？』

「久しぶりだなー」

『え、ええ？ あの、はい、お久しぶりですつ。ええとええと、いつ以来でしたっけ、お話するのは』

「今朝ぶりだぜ」

『今朝！？ 今朝ですか！ ……、はい、今朝、お話ししましたね、確かに。そんな気もしますね。だ、大丈夫ですよつ。忘れてたりなんかしませんよつ。本当はあなたの名前が出てこないなんてことありませんよつ』

「そうか。もちろん分かっていると思うが、俺は異無だからな？」

『ああつ！ ……、はい、異無さんでしたか？。異無さんですよ。大丈夫ですよ、知ったかぶりとかじゃないですよ』

こいつ簡単に詐欺師に引つ掛かるんだろうな。冗談のつもりでオレオレ詐欺やったのに、まさか成功してしまうとは。これがアホな子クオリティか。

『それであの、どういったご用件ですか？』

「お前の母親が交通事故に遭った。このままだと死んじゃう。病院にいるんだが、治療費が必要だ。今から言う口座番号に金を振り込んでくれ」

『は、はわわわわ』

「はわわじゃねえ。嘘に決まってるだろ」

こいつは焦ると何故はわはわ言い出すのか。変な生き物である。

『え、そう、ですか。あはは、あんまり変な冗談はやめて下さいよつ』

「さすがにこれは騙される方が悪いと思うが……」

『す、すみません』

「別にどうでもいいけど」

『すみません……。それで、ご用件とは何でしょうか？』

「いや……なんか気が抜けちゃった。まあ、全然無事っぽくて何よりだ」

『は、はあ。よく分かりませんが、それは何よりです』

「それでお前、あの後どうしたんだ？　ちゃんと病院行ったのか？　足怪我してたる」

『あの後、ですか？　ええと、すみません、何のことでしょうか…』

…』

「はあ？　何のことでしょうか、そりゃあ」

「どういうことだ？　奈々乃は忘れている？　覚えていない？」

「いや、これはもしかして、」

「お前、さっきまで何やってた？」

『さっきまでですか？　……そうですね、何をしていたかと言われれば、強いて言うならお昼寝してました。なんだか家に帰ってからいつの間に寝てしまったみたいなんです』

「下校中、何か変わったことはなかったか？」

『下校中ですか？　ええと、特に変わったことはなかったと思いますが、何でしょう、なにかもやめます』

「そうか。普通に下校して、家帰ったらいつの間に寝てて、今起きたのか」

『はい、異無さんからの電話で目が覚めたところですよ』

「足に何か異常は無いか？　酷く痛むとか。それか頭部にケガしてるとか」

『？　ないですよ？』

「なるほど、分かった。ならいい。邪魔したな、もう電話切るぞ」

『あ、はい、また明日です』

「また明日」

ガチャリと。受話器を置く。

ふうむ。

これはあれだ。奈々乃のやつ、記憶を消されている。しかも瓦礫に挟まれた足も、切った眉間も完治しているらしい。

おそらく、あの後彦星に勧誘され、断つたがために記憶を消されたのだろう。

ちゃんと治療はしてくれたみたいだから、そんなに悪いやつじゃないのかも知れない……いや、ケガも証拠の内だ。隠滅するための治療か。

彦星と篤木が所属している組織、『レジスタンス鳥合の衆』、か。

白い少女。妹似の少女。

能力の暴走した悪友。三角錐の魔獣。

神屠学園。魔界。魔物。協会教徒。世界政府。

異能力者。超能力者。無能力者。

特別クラス、十五組。

俺。妹。

何か、何か悪いことが起きているような気がする。とても、悪いこと。

なんだろう。

なんだろう。

歯車が、歯車する。

回転が、回転する。

運命が、運命する。

得体の知れない何かの、得体が知れない。

何か、何か。

ばらばらのパズルが、ばらばらにくつつき、気持ちの悪い山を成す。

それぞれの断片が、断片的にくつつき、吐き気をする山を成す。  
成した山は更に成り。  
成した山は更に増え。  
成した山は更に伸び。

崩れ去る。

時計を見る。

もう、夕飯の時間だ。

まあ、考えるのは後でいいか。いや、別に考える必要もないか。  
そんなことより、飯を美唯のところに運んでやらないと。確か、  
昨日の余りがまだ残っていたはずだ。

異無家は二人暮しだ。飯の時間は、俺が美唯の部屋にお邪魔し、  
適当に談笑しながら食うのが日課だ。

なんか久々に一騒動あった気がするが、まあ、なんだ。別になん  
でもいいか。

俺には関係ない。

俺は平和に暮らしたい。

俺は首を突っ込まない。

だからそちらさんも首を突っこんでくるな。

無能力者は平和に暮らしたい。

## 九話

現状を一言で説明してみよう。  
感情を一言で解説してみよう。  
今朝を一言で表現してみよう。

ぶったまげた。

おったまげでも可。

どったまげでも有。

さて、いやはや、うん、ううむ、これは、一体、なんというか、  
なんつつか、どうしたもののか。

そうだな。

まずはことの始まりからおさらいしてみようか。

とある日、とある町の、とあるところで、とある人間の子が生ま  
れました。

とある両親は、とある時思いついた、とある名前をその子に名付  
けました。

その名前は、良人というそうです。異無 良人というそうです。

いや、落ち着け俺。戻りすぎた。今のなし。そもそも出世時の記  
憶なんかねえよ。

ちよつと気を落ち着けよう。

あれだ、羊を数えよう、羊。

シーブがワン。シーブがツー。シーブがスリー。シーブがたくさ  
ん。シーブがたくさん。シーブがたくさん。シーブがわらわら。シ  
ーブがうじゃうじゃ。シーブが無量大数。

……よし、落ち着いた。大分落ち着いた。

いや、つつこまないでくれ。落ち着ければなんでもよかったんだ。とにかく、どうして目の前のこれはこうなっているのか、今度こそおさらいだ。

まず始めに、俺は朝、普通に起きました。

登校しました。

教室入りしました。

席に着こうとしました。

俺の席に誰か座っていました。

白い少女でした。

「……」

「……」

とても白い少女でした。

白い制服、白い髪の毛、白い肌、白い腕時計。

昨日、奈々乃を襲っていた、あいつ。昨日、彦星を襲った、こいつ。

シンプルに思う。

なんで居んの？　なんでよりもよって俺の席？

仏頂面の少女は、鬱陶しそうに俺を見て、黙り、黙り、押し黙り、そして気まずそうに目を逸らす。

「……なんか用？」

なんか用も何も、それはこちらが言いたい。

「いやそこ俺の席なんだが」

簡潔にそう述べる。色々言っただけ言いたいことがあるが、聞きたいことがあるが、とりあえずはまずそれ。



どんな返事が来るのかと、気構える。そりゃそうだ。こいつは平気な顔して人の首に刃物を突き付けるようなやつなのだ。しかも、こいつは何の前触れも無く、まるで瞬間移動のように、いや空間移動のように、場所を移動する。

奈々乃を襲った時も、彦星にナイフを突きつけた時も、パツと、まさしくパツと移動しやがったのである。おそらく超能力者がそこいらの化け物なのだろう。

だから、あまりにも普通な、普通な少女のように、ぼけっと呆けたのが意外だった。

一瞬、どこか虚空を見つめ、白い少女は、  
「席」

「せ、せき？　せきとやらがなんだって？」  
「間違えた」

「……」  
「どう反応すりゃいいんだよ。」

「ごめん」  
「謝っちゃったよ。」

「今どく」  
「それはどうも。」

白い少女は席を引き、立ち上がると、意外にも、覚束ない足取りでどく。どうしたんだこいつ。やけにフラフラしているが。寝不足なのだろうか、目にはひどいクマがある。目も虚ろで、反目だ。今にも寝てしまってもおかしくない。

「……おい？　大丈夫かお前。顔色悪いぞ」  
「そうね。味噌汁は赤味噌に限るわ」

寝ぼけてらっしゃる。確実に寝ぼけてらっしゃる。目の焦点が合っていない。食卓に焦点を忘れてきている。

なんだか拍子抜けもいいところだ。昨日、あれだけの異彩を放っていた人間が、なんだこれ。なんだらうこの様は。これではまるで、ただの寝ぼけ小娘である。

「今……私、変なこと言わなかった？」

赤味噌がお好きだそう。なんて言ったら何をされるか分からない。証拠隠滅で貴様の赤ミソを破壊してやるぜうけけなんて言いだすかも知れない。……それは嫌だなあ。

「何も聞いてないです」

というわけで、そう答える。なぜか敬語になってしまったが、きっと、本能がこの女のご機嫌を損ねてはいけないと判断したのだ。

「そう」

白い少女は、それだけ答え、その場で立ち尽くす。ポーっと立ち尽くす。

「何やってんだ？」

「そうね。赤味噌は邪道だわ」

前言撤回しやがった。もう、本当、そんなに眠いならさっさと帰って寝るよ。というか、それ以前に、本当に何でこんな所に居るのだろうか。

「私、やっぱり変なこと言ったでしょ？」

「何も聞いてないです」

「そう」

また同じ問答をし、白い少女は、やはり突っ立つたまま。何を思ったのだろうか、不機嫌そうな目で、こちらを見詰める。見詰める。見る。視線。もはや睨んでいる。こええ。

「どした？ 俺の顔に何か付いてるか？」

答えない。ただ見詰める。ひたすら見詰める。その瞳に何を思っているのか。俺の顔をジロジロと遠慮も無く見詰め続ける。気まずい。これは気まずい。視線の重圧に負けて、言葉が出ない。だけど、だけれど、なんとというか、

綺麗な瞳だ。

そんなことを思う。

そう思った直後、

「良人」

白い少女が、俺の名を呼ぶ。そして続ける。

「良人。私は、私は……」

その後何が続いたのだろうか。どう続けるつもりだったのだろうか。

「……何でも、ない」

それだけ言い、ふいつと背を向けてしまう。何事もなかったかのように、歩き出す。ふらふらと、ふらふらと、そのふらふらの背中に、小さな背中に、何を背負うのか。何を背負っているのか。

俺は、なんだか励ましてやりたい衝動に駆られる。なぜかは分からない。なぜだろうか。とても懐かしい感じた。面識もないのに。その背中を止めなければ、声を掛けてやらなければ、彼女は壊れてしまう気がして、だから声を掛ける。

大丈夫だ、心配すんな、と、笑顔で。

「お前は一体、何なんだ？」

だが、出てきたのはそんな無骨な疑問だった。表情は笑顔ではなく、ただの無表情だった。

「時旅。時旅ときたび。葉よう。クラスメイトの名前も忘れたの？」

透き通る、凜とした声音でそう言い残し、一番後ろの席へと歩いていく白い少女……。いや、時旅、とやら。当然のように、席に着いた。

そうだ。

どっかで見たとあると思ったら、そうかそうか、そうだ、あい

つだ。

時旅 葉だ。入学式初日に、一回だけ顔を見たことがある。あの時は普通の制服着てたから、思い出せなかった。

十五組には、入学式からずっと空いていた席があったのだ。一番後ろの席だ。毎朝、担任の火雷が出席確認する度に言っていた。

『時旅のやつは、また欠席か』と。確か、“十五組の見えない生徒時旅さん”なんて誰かがふざけて怪談みたいなことを言っていた。

あいつがそうだったのか。

いつも空いているはずの席が埋まり、クラスメイトの視線が時旅に集中する。当たり前だ。十五組の見えない生徒であるはずの時旅が、こつこつと見えてしまっているのだから。

しかも、時旅は、十五組の特待生だったりする。

特待生。

学園でも特に能力値の高い生徒が選抜され、各クラスに割り当てられ、そのクラスの代表として、生徒の見本として、管理者として、権力者として、存在意義を成す。言わば委員長の大げさバージョンだ。

十五組の生徒は入学してから三週間ずっと、存在しない特待生として、時旅という名の生徒を認知していた。誰も、顔も素性も知らない特待生。おそらく、担任の火雷ですら声も顔もほとんど記憶に無いのではなからうか。

特待生には、学園内での、様々な特権が許されている。それはもう様々多種多様で、例えば、テストの点数さえ良ければ出席を免除される、とか。特待生というのは、そんな存在なのである。一般生徒とは一線を画す、ましてやこんなクラスのミソカス能力者達とは住む世界の違う生物。負け組みと蔑まれる十五組の特待生と云えど、特待生は特待生だ。

それが今日、突如として現れたのだ。注目するなという方が無理な話である。

というか、あの白い制服は特待生用のものだったのか。確か一、

二回見かけたことがある。ちなみに、十五組は特別指導クラスだから、他のクラスとは少し離れた位置にある。そのため白い制服を見る機会がほとんどなかったのだ。

そして、時旅の姿を見て、一際驚愕している生徒が一人。

「……」

目が点になっている。彦星 香苗だ。

昨日、自分の首を刈ろうとした謎の生徒が、クラスに普通に登校してきていたのだ。ましてや、クラス代表だったのだ。昨晚自分の家に押しかけた暗殺者が、次の日クラスメイトになっていた、みたいな感覚だろう。

彦星は、昨日突きつけられたナイフの感覚を思い出したのだろうか、時旅を窺いながら、首に巻かれた包帯を手で触っている。

時旅と彦星の視線がぶつかる。

だが、すぐに、こてん、

「……」

力尽きたように眠ってしまう時旅。相当我慢していたんだろうな。拍子抜けしてしまう時旅の様子を見て、だがおかまいなしに、席を立ち、ずんずんと時旅の席へと突き進む彦星。

そのまま、無言でバンツと机に両手を置く。

しばらく経ち、緩慢に顔を上げる時旅。相変わらずのしかめっ面だ。

クラスメイト達が、小声でざわざわ騒いでいる。修羅場だと感じ取ったのか、何人かの生徒は見えていない振りをしている。

だがクラスの空気など気にも留めないといった風に、空気なんてものは、まさしく空気のように無視し、

「……………」

何事か呟く時旅。

言うつとすぐに眠りの世界に戻っていつてしまう。

「……………」

緊張に固まる彦星。

なぜかこちらを見る。なんだ、今日はよく顔を見詰められる日だ。そんなに俺の顔は変か。

何か言葉を発しようとしたのか、口をぱくぱくとし、だが何も出てこなかったらしい、諦めたように席に戻る。

どうやらあれだけのやりとりで、二人の間には、とりあえずの距離が置かれたようだ。

クラスの空気が柔らかくなり、いつもの談笑が戻っていく。

まあ、なんだ。

あの二人には関わらないようにしよう。

迂闊に触ると命がいくつあっても足りないような気がする。

俺は何も見なかったことにし、何も知らない振りをし、自習を始める。気晴らしだ。今日は行地もないから静かだしな。はかどるはかどる。

……。

はかどるはかどる。静かだからな。

……。

はかどるはかどる。静かではあるからな。

……。

はかどるはかど、はかどらねえっ！

「そんなに見詰められると集中出来ないんだが？ 用があるなら用があると言え」

顔を上げ、さっきから目の前で俺を観察し続けるそいつに言う。やる。俺の顔はそんなに珍しいのか。どうして今日はこんなに見詰められるのか。

「い、いえ、あの、すみません」

謝られても。

「別に怒ってねえよ。そんでご用件は？」

先程から佇む奈々乃に用件を聞く。

「用、というほどではないんですけど……」

「もったいぶるな」

「す、すみません。……あのー、時旅さん」

「時旅さん？」

「時旅さんには、あんまり、近付かない方が、いいです」

「はあ？」

言い難そうにぼそぼそと言い、たたと早足で自分の席に戻っていく。

相変わらず不思議なやつである。

いや、といっても時旅には近付かない方がいいというのは俺も賛成だが。

そういえば、彦星のやつ、今度は奈々乃のことを凝視している。

奈々乃がいることが、そんなに不思議なのだろうか。もしかしたら、昨日のことに関わることなのかも知れない。またもや席を立ち上がろうとする彦星だが、やっぱり気が変わったのか、上げかけていた腰を落ち着ける。

……。

なんだろう。

なんかすげえギスギスしてねえ？ このクラス。

居辛い。というか気まずい。後ろの席のあの子とか特に。殺気のようなものを感じるし。

ああ、はよ戻って来い行地よ。

俺だけにこんな思いさせんじゃねえ。

## 時旅 葉・一話

これは、長い長い、私と良人の物語。

これは、遠い遠い、自分と最愛の人の物語。

始まりの始まりは、序章の遙か昔。

もう何年も前の物語。忘れ去られた、失われた物語。

今日は少し、思い出に浸ってみようと思う。

少し疲れたから、少し辛いから、少し挫けそうだから。

あいつの笑顔を思い出す。

まだ小等部に入学したばかりの頃。

私は、とても気弱な少女だった。

右も左も分らず、上も下も分らず、ただただふらふらわたわ  
た。

何をするのも怖くて、何をしても駄目で、何をしても上手くいか  
なくて。失敗ばかりで、その度にかかわれ、その度に泣き、その  
度に心を閉ざしていく。

愚図で愚鈍で愚直で間抜け。ついたあだ名がロバ女。ロバ女だよ  
？ ロバ女。

でも、そんなロバ女を、いつも先導してくれる、ヒーローがいた。  
そいつはいつも優しく、笑顔で、明るくて、正義感が強くて、  
人気者で、勉強が出来て、運動も出来て、要領が良くて、頭が良く  
て、格好良くて、変なことまで馬鹿で、肝心なところでミスばかり  
で、根本的などころでアホで、妙なところで頑固で、ときたまドジ



で、ときたま気遣いが下手で、分かりやすく、話しやすく、一緒に居て楽しくて、分かりにくくて、話しにくくて、でも一緒に居なくて、そして何もかもが駄目な私の手を引いてくれた。まさに憧れのヒーローだった。完璧だった。無敵の最強の私の憧れ。

彼と初めて話したのは、確か入学式初日のことだった。

桜が綺麗だった。

とても綺麗だった。桃色で、鮮やかで、繊細で。

幻想的な桜の舞い散る並木道。風が吹くたび、吹雪のように花びらが舞い、まるで新入生を歓迎しているかのようで。ひらひら、ひらひら。

桜。

私はそれが、怖かった。

あの綺麗な桃色が、人を惑わし誘惑しているようで、怖かった。幻想的な並木道が、どこか恐ろしい場所へと続く道みたいで、怖かった。風が吹くたびに巻き起こる桜吹雪が、無数の害虫が飛び交っているようで、怖かった。

怖かった。足が竦んで動けなかった。

なんでみんなわらっているの？　なんでみんなたのしそうなの？

私の手を引く母親が、綺麗だね、と柔らかに微笑む。

いみがわからない。なにをいっているんだろう。

子供心に思った。私は、きっと普通の人間じゃないんだな、と。

変な、気持ちの悪い子なのだ。

もしかしたら、私は人間ではないのかも知れない。もしかしたら、私は人間に似た何かなのかも知れない。

そんな自分が怖い。そんな自分を見る他人が怖い。そんな自分と他人の周りを舞う桜が怖い。

こわいこわいこわいこわいこわいこわいこわいこわいこわいこわいこわい。い。

こわいこわいこわいこわいこわいこわいこわいこわいこわいこわいこわいこわい。

い。

「怖くないよ」

道端で、頭を抱えて震える私に、その声を掛ける彼。

「怖いなら、目を瞑っていいればいい」

そいつは、遠慮もせずに私の手を掴み、

「僕が、こっやって手を引いてあげるから」

歩き出す。

自然に、私も歩き出す。つられて歩き出す。二人で、前へと進む。  
私は、目を丸くし、語り掛ける。

きみはだれ？ おなまえは？ なんでわたしのてをにぎるの？  
なんでまえへすすめるの？

彼は答える。

ただ一言。

「ほら、ちゃんと歩けてるじゃん」

「……ほんとうだ」

何も怖くなかった。

桜も、人も、自分も、入学式も、全然怖くなかった。  
彼の手は、とても暖かくて、力強くて、頼もしくて。  
この時から彼は、私のヒーローになった。

小学二年生に進級した頃。

私のあだ名がロバ女になった頃。

私は、クラスでいじめを受けていた。

入学式以来、彼とは、ほとんど話していない。いや、会ってすらない。

それもそうで、私の通うクラスは十五組で、あの男の子の通うクラスは一組なのだから。

十五組は特別指導クラス。落ちこぼれクラス。負け組みクラス。駄目クラス。

一組は特別指導クラス。優等生クラス。勝ち組クラス。良いクラス。

会えるはずもない。

住む世界が違う。実際に教室の位置も遠く離れている。

神屠学園は広大で、巨大で、十五組と一組の間には、長い長い距離がある。

私みたいな愚図な方向音痴がそんなところを目指したら、辿り着くまでに何度迷うことか。人に道を聞くことも出来ない。私は臆病だから。きつとどこへ行こうとしているのか訪ねられても、黙ってしまうことだろう。

例え迷わなかったとしても、行くこと自体が怖い。人に視線を向けられること自体が怖い。ただでさえ校舎を歩くのが嫌なのだ。

でも、彼にもう一度会いたい。入学式の日、私の手を握ってくれた彼。ただそれだけなのに、彼は今でも私の心の中に残っている。遠いといっても、所詮校舎内。行こうと思えば誰でも簡単に行けるのだろう。

でも無理だ。私には無理だ。一緒に行く友達も居ない。どころかいじめられている。勇気もない。どころか病的なまでに臆病だ。

それ以前に、彼は私のことなんか覚えていないだろう。

入学式の日、一度会ったきりなのだ。しかも十五組の生徒が一組の生徒に話し掛けるなんて、おこがましい。

今の世の中は、完全実力主義。異能力の弱い者は強い者に逆らえない。逆らいたくば、そいつの上に立つしかない。

例え小等部だとしても、そんなことはお構いなしでこの制度は適用される。むしろ積極的に、強い者が上に立つのだと、小さい頃から脳に刷り込ませられる。

『弱いものは淘汰され、常に強いものが上に立つ。上に立ちたいのなら強くなれ。それが出来ないのなら踏みにじられている』  
学園の訓示にもそうある。

踏みにじられるしか能のないクラス内でさえ、踏みにじられるしか能のない私だ。そんなゴミが、一組様のクラスを訪れたら、どうなることか。考えるだけで全身が震え上がる。

きつと、私が彼に会うことはもう二度とないのだろう。  
そう思っていた。

三年生に進級した頃。

私のあだ名がオバケ女になった頃。

私は、まだクラスでいじめを受けていた。

子供は無垢なもので、無垢は残酷なもので、残酷は怖いもので。いじめはほとんど際限なくエスカレートしていった。

ついに私は塞ぎこんでしまい、誰とも話すことが出来ない精神状態にまで陥っていた。誰も信じられなかった。人間が恐怖の対象でしかなかった。

私はいつも下を向き、暗い顔で黙り込んでいた。この頃、私の髪の毛は非常に長く黒かったため、いつしか口バ女のあだ名はオバケ女になっていた。

でも一人だけ、私のことをオバケ女ではなく“臆病女”と罵る少年が居た。

クラスで私をいじめていた男子の中でも、特に口が悪く、入学初日から突っ掛かってきていたやつだ。そいつは粗暴で、乱暴で、孤独で、毒舌で、意地悪で、強くて、怖くて、怖くて、怖くて、私の

一番の敵だった。

その少年はクラスの中でも浮いていて、いつも一人だった。気性が荒く、喧嘩ばかりしていて、毎日傷だらけだった。

少年は私に言うのだ。

「死ね、臆病女」

少年は言うのだ。

「お前を見てるとイライラする。死ね」

いつも言うのだ。

「まだ不登校にならないのか？ 早く死ねばいいのに」

言うのだ。

「たまには言い返してみろ、臆病女。悔しくないのか？ これだけ言われて悔しくないって思うなら、死ねばいい」

毎日毎日。

悔しくないわけがない。

嫌じゃないはずがない。

そんなに言われて。

ただそれ以上に怖いだけだ。

でも、それでも、私は毎日登校する。絶対に、登校し続ける。

それは、私が少年に出来る、ささいな反抗だった。私があると、少年は決まって嫌な顔をするのだ。その嫌そうな顔が、イライラする顔が、見たかったから。一番の敵である少年に、少しでも不快感を味あわせてやりたかったから。

だって悔しかった。

……ああ、もう一度彼に会いたい。いつか彼が助けに来てくれることを祈りながら、私は今日もいじめに耐える。

四年生に進級した頃。

私のあだ名が不登校になった頃。

私は、もういじめを受けてはいなかった。

いじめを受ける道理がなかった。私は悟ったのだ。会いさえしな

ければいいのだ。会わなければ誰も私に手出しできない。会わなければこちらの勝ちだ。ざまあ見る。もうお前らなんか怖くない。もう何も怖くない。ここまでこれるものなら来てみる。私は無敵だ。まさしく、正しく文字通り無敵だった。

敵が無かった。

敵の声が無かった。

敵が、居なかった。

一番の敵の言葉を思い出す。

確か、あの少年は言っていた。

『たまには言い返してみろ、臆病女。悔しくないのか？ これだけやられて悔しくないって思うなら、死ねばいい』  
「悔しくないわけないよ」

次の日、私は久々に登校した。

四年生になってから、初めての登校。相変わらず、クラスメイトは一年の頃からほとんど変わっていない。進級するたび、二、三人の才能が開花し、上位のクラスへ移っていくぐらいだ。入れ替えに、才能のないやつが入ってくる。

弱い者は淘汰され、強いものが上に立つ。まさにその通りのシステム。

逆に言えば、強ければいい。

そうだ。

もう顔もうる覚えだけど、あの入学式に会った彼に、もう一度会えるのでは？ 私がもっと強ければ、会えるのでは？

そんな無謀な考えが一瞬頭によぎるも、すぐに無理に決まっていると考え直す。

馬鹿らしい。私が一組になろうなんて馬鹿らしい。

でももっと馬鹿らしいことが起きてしまった。

「久しぶり」

「……あ、……あ……なん、で」

私が上に行けば、彼に会える。

逆に言えば、彼が下に行けば、私は会える。

涙が出た。久々に、大きな声を出した気がする。

彼が、私のヒーローが、十五組に居た。クラス替えて、一気にここまで落ちてきたらしい。

ヒーローが助けに来てくれた。ヒーローが私に会いに来てくれた。救いに来てくれた。

それからの私は無敵だった。真実の意味で無敵だった。偽物の無敵でも、敵前逃亡での無敵でもなく、真っ向勝負で打ち勝っていた。

なにせ私の隣にはヒーローがついているのだ。負けるはずがない。彼は最初、クラスメイトの格好の的だった。天の上だった一組の生徒が、憎悪の対象だった一組の生徒が、いきなり落ちこぼれて目の前に現れたのだ。皆が皆、これ見よがしに男の子を攻撃した。

でも、彼は強かった。当たり前だ。理由は分からないけど、ついこの前まで一組やってた生徒が、そんな簡単に十五組の有象無象に負けるわけがない。

私も一緒に戦った。今までの怯えようが、無口ぶりが嘘のように、私は気を強く持ち、クラスメイトのいじめに反抗した。

やめてほしいことは、正直にやめてほしいと言った。言うことが出来た。隣に心強い味方が居てくれたから。

毎日毎日、いじめはもうやめてくれと、言い続けた。気持ちを伝え続けた。

結果、いじめは無くなった。一切なくなった。それどころか、今までごめん、と謝ってきた。

子供は無垢で、無垢は素直で、素直は怖くない。

もう怖くない。悔しくない。

いつの間に、あのいつも突っかかっていた少年も、何も言っ  
て来なくなっていた。いじめられていた時は、あれだけ死ね死ね連  
呼していたのに、あいつは、まるで興味がないように話し掛けなく  
なっていた。

いい気味だった。

五年生に進級した頃。

私のあだ名が腰巾着になった頃。

私は、またクラスでいじめを受け始めていた。

といつても、一部の女子連中からだ。腰巾着は、その女子連中が  
勝手に呼んでいる呼称。

そして、このいじめが実にねちっこく、ばれないように、あから  
さまにはばれないように、巧妙に嫌がらせをしてくるのである。

原因は、私と例の彼の仲が良すぎたため。

彼は、実にモテたのだ。めちゃくちゃモテた。

誰にでも優しく、頭が良く、運動も得意で、異能力の実技テスト  
はいつも満点で、格好良くて、でもどこか抜けてる。女子からは憧  
れの的だった。男子からは多少疎まれてはいたけど、基本的にリー  
ダー的立場だった。さすが私のヒーロー。

そんな彼と私は、これでもかと言うぐらい仲が良かったのだ。な  
んというか、もう、ラブラブと言っても過言ではないぐらいに。

うん、気持ちは分かる。分かるけど、分かるだけに、なんだか私  
が彼を独占しているみたいで、申し訳ないというような気持ちもあ  
り、反抗できなかった。

彼も、これには気付かなかった。むしろ、今の関係が崩れるのが  
嫌で、私もいじめられていることを隠した。私がいじめられてると  
知れば、彼は離れて行ってしまっくんじゃないかと、怖くなったのだ。  
優しいヒーローは、私に迷惑を掛けまいと、離れて行ってしまっくん  
じゃないかと。また、私は臆病になってしまった。

そんなある日のこと。



「だからお前は臆病女なんだ」  
また敵が現れた。

あいつが、気が荒くて孤立しているあの惨めな少年が、また私を馬鹿にし始めた。何に對してイライラしているのか、何で私を見て不愉快な顔をするのか。

腹が立った。ムカついた。少し怖かった。

でも、もうあの頃とは違う。こっちには心強い味方がいるんだから、心の支えがあるんだから。

私は、始めて、そいつに言い返す。

「うるさいっ！　いつも一人のあんたに言われたくない！」

「……」

「わ、私だって、もう前とは違うのっ。変わったのっ！　それなのに、あんたはいつまでもそうやって、馬鹿みたいに喧嘩ばっかしてそんなだから誰も友達が出来ないんでしょっ！」

言ってやった。ずっと言ってやりたかったことを、言ってやった。だけれど、すぐに言ってしまったことを後悔する。そいつの反応を見てしまい、後悔する。

「悪かった」

謝ったのだ。目を逸らし。

とても、寂しそうな顔で。

「嘘だ。死ね」

すぐに後悔したことを後悔した。

六年生に進級した頃。

私のあだ名が、ついにメス豚になった頃。

一部の女子達からのいじめは最高潮に達していた。だって、メス豚だよメス豚。いくら何でもあんまりだと思う。一応言っておくけど別に私は太っていない。

この頃になっても、彼と私の仲は、とても良かった。まだ関係は続いていた。

ある日、私は聞いた。

「何でそんなに優しくしてくれるの？　こんな私に優しくしてくれるの？」

「君がきれいだからだよ。脆くて弱くて純粹で繊細で臆病で、きれい」

彼はそう言うと、顔を赤らめ、私から目を背けてしまう。

きざったらしいセリフを言うわりに、彼はいつも露骨に照れ隠しをするのだ。私は、そんな少しぶきっちょなところも好きだった。

好きだった。大好きだった。

もう、彼がいなくなったら私はやっていけないほどに。彼がいなくなったら、私もいなくなってしまうほどに、私は彼に寄生していた。頼りきっていた。

そして、ある冬の日のこと。

「おい、臆病女」

例によって、あの少年が話し掛けてきた。未だに私の悪口を言う、あの少年が、話し掛けてきた。嫌いな、大嫌いな、あの敵。

「もうやめてよ、そのあだ名」

「あだ名じゃねえ、本名だ。臆病女」

「……それで何のよう？」

「お前、あいつと付き合うのもうやめろ」

“あいつ”。彼のことだ。

何でこいつに、そんなことを言われなければいけないのか。何でこいつは、こんなにも私に絡んでくるのか。

「嫉妬？」

「ぶっ殺すぞ」

怒った顔が本当に怖い。こいつ、目つきが物凄く悪いのだ。睨まれたら私でなくても怯む。

「じゃ、じゃあ何で？」

「目の前でイチャイチャされると腹が立つんだ。イライラする。ぶち殺したくなる」

「あつそ。殺せるもんなら殺してみてよ」

「……。死ね」

少年はそれだけ言うと、背を向け、自分の席へと帰っていく。結局、何が言いたかったのだろうか。

そして次の日。

少年は、学校を休んだ。体力しか取り得の無かった、あの腹の立つ少年が欠席したのだ。

六年間、あいつが欠席することは一度もなかったのに。ちょっとだけ気掛かりだったけど、それ以上に愉快だった。ざまあない。

次の日。

また少年は学校に来なかった。

次の日も、次の日も、また次の日も、あの少年は学校を休み続けた。

教師の話によると、事故に遭って入院しているらしい。三ヶ月は学校に来れないという。さすがに少し心配だったけど、さんざん私をいじめ続けたバチが当たったのだと、解釈した。

気の毒に、二カ月後は卒業式だというのに。といっても小等部から中等部に進学するだけなんだけど。

あの少年が入院し、私と彼との間に邪魔は無くなった。いや、まだ女生徒達からのいじめはあるけれど、でもそんなことにはとつくに慣れてしまったし、気にならない。あと二ヶ月、彼と最高に幸福な時を過ごせる。

でも違った。

また、クラスぐるみでのいじめが始まったのだ。

今まで私を密かにいじめていた女子グループは、今度はどうどうと。

改心したと思っていた二、三年時のいじめの主犯格達は、前よりも更に酷く。

意味が分からない。いじめは、確かにやめさせたはず。彼と一緒に。二人で頑張って抵抗して。

なんで今更？ 小等部はあと二ヶ月で卒業なのに。

私は抵抗した。彼も抵抗した。

彼は私を守り、私は彼を励まし、いじめに全力で反抗した。

結果、いじめはなくならなかった。

どころか、卒業が近づくにつれ、卑劣なものになっていった。

耐えた。我慢した。二ヶ月間、私と彼は、ただただいじめに耐え続けた。

一緒に卒業しよう、と。一緒に最後まで頑張ろう、と。

私を元気付けようと、無理に明るい笑顔を向けて。無理に元気に振舞って。

そして、小等部の卒業式。

この日、全ての種が明かされる。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9760w/>

---

最強の無能力者

2011年10月4日03時38分発行